

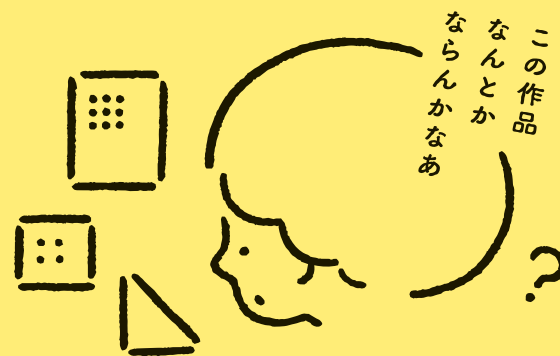
A BOOK TO ARCHIVE LIFE

# どうしよう

からはじめる

# アーカイブ

作品を記録し、伝える方法



監修

須之内元洋

編著

みずのき美術館 | 鞆の津ミュージアム | はじまりの美術館

「どうしよう」からはじめるアーカイブ

A BOOK TO ARCHIVE LIFE

# どうしょう から はじめる アーカイブ

作品を記録し、伝える方法

監修

須之内元洋

編著

みずのき美術館 | 鞆の津ミュージアム | はじまりの美術館

# アーカイブって 何!?

障害者支援施設の創作活動では、  
いろいろな悩みが浮かびます……。

どんどん増えていくけど、  
どれを選んで、  
記録すればいい?

たくさん作品が  
たまっているけれど、  
どうしたらいいだろう……。

作品の整理の方法や、  
管理の方法が  
わからない。



どこからが作品で、  
どこからが  
作品じゃないの？

どうやって作品を  
記録したらいいの？

きいたことはあるけど……  
「アーカイブ」って何？



なぜアーカイブ  
したほうがいいの？

どのくらいの  
労力がかかるもの？



この本は、3つの美術館が障害者支援施設での活動を通し  
「メンバーが日々生み出すものをどうしたらいいのか」  
という疑問から生まれました。  
生み出されるさまざまな表現を  
「アーカイブ」した実践と方法を紹介しています。

## はじめに



はじまりの美術館 館長  
**岡部兼芳** (おかべ・たかよし)

この本は「アーカイブ」なるものに取り組んだ、3つの社会福祉法人が運営する美術館の手探りの記録です。

そしてこの本は、主に障害のある人の創作活動に関わる支援者やご家族・ご本人で、作品の保管や管理・活用に関して悩みを持つみなさんに手にとっていただければと考え、制作したものです。手探りの記録ですので、うまくいったことも、そうでなかったことも書かれています。それは、私たちの試行錯誤の過程も見ていただくことで、この本を手にとった方がそれぞれの想いにより近い方法を見つけていただく

手がかりになるのではないかと考えたためです。ですので、作品整理やアーカイブについての正解が載っている「マニュアル本」ではありません。また、本書の制作を含むアーカイブ事業は、日本財団の支援をいただき実施しました。必要な機材の整備や、デジタルアーカイブ構築の有識者に指導を得ることができました。そのため「私たちにはそんな財源も時間も、人手もない」と思われることもあるかもしれませんが、そうした背景も含めた、3つの事例と考えていただければと思います。

「現実的でない事例を見せるのか」と言われるかもしれませんが、決してそうではありません。数年前、創作活動を担当するスタッフだった私は「いつか作品の整理をして、データベースができるといいな」「みんなの作品を紹介できるウェブサイトがあるといいな」と、一人で夢想していました。いま、美術館の担当になった私は、開館からともに歩んできた姉妹館<sup>※</sup>、専門の違う同僚のスタッフや創作を担当するスタッフ、アーカイブの設計者、アーティスト、デザイナー、編集者とたくさんの方と繋がることができました。それぞれの観点から知恵を出し合い、力を合わせ今回の事業に取り組めたことで、あの日夢に描いた以上のことが実現できたと考えています。しかしながら、私たちの手探りはいまもまだ続いています。

実は、この本をつくる際にも、様々な議論を重ねました。そのひとつが、言葉の選択です。「作品」か「表現」か、「作家」か「作者」か、「制作」なのか「創作」なのか。それはすなわち、自分たちの毎日にもう一度向き合う作業でもあります。障害のある方がその表現を通し、今回のような動きをつくったり、人と人をつないだり、物事の見方を変えるきっかけをつくったりする。それらが私たちの毎日をよりよく生きる力になるのではないかと、いうことに、アーカイブを通して再認識しました。この続きは、本書を手にしたあなたと、一緒に手探りしていけたら嬉しいです。

※ ボーダレス・アートミュージアムNO-MA(近江八幡市)をモデルに、日本財団のサポートで開館した美術館。薬工ミュージアム(高知市)、鞆の津ミュージアム(福山市)、みずのき美術館(亀岡市)、はじまりの美術館(猪苗代町)。

## Contents

はじめに 岡部兼芳（はじまりの美術館）	06
3つの美術館とデジタルアーカイブ	10
アーカイブとは何か 生きていくための記憶の伝達術 須之内元洋	16

Chapter 1 作品を整理しよう!	22
---------------------	----

Chapter 2 デジタルアーカイブをつくらう!	42
---------------------------	----

Appendix プロジェクトの記録	64
--------------------	----

### 座談会

どうしよう、アーカイブ ～支援しながらアーカイブなんて無理じゃない!?～	66
---	----

### プロセス

3つの美術館のアーカイブプロジェクト	72
--------------------	----

出会いのはじまり 大政愛（はじまりの美術館）	76
---------------------------	----

あちらこちらに「生きた証」が 津口在五（鞆の津ミュージアム）	78
-----------------------------------	----

アーカイブのプロセスとノウハウの公開 奥山理子（みずのき美術館）	80
-------------------------------------	----

## デジタルアーカイブのプロセス

本書では、実際に行ったプロセスに沿ってデジタルアーカイブの方法を紹介しています。

作品を整理しよう!

1 目的と方針を決める	24
2 対象を決める	26
3 チームをつくる	28
4 情報の調査をする	32
5 作品の管理をする	36
6 作者から同意を得る	40

デジタルアーカイブをつくらう!

7 作品の画像データを用意する	44
8 撮影した画像を加工する	52
9 データ管理環境を整える	54
10 サイトのデザインを考える	58
番外編 アーカイブを活用する	62



# みずのき美術館

住所：京都府亀岡市北町18 運営：社会福祉法人松花苑

## ● みずのき美術館とは？

みずのき美術館は、母体である障害者支援施設「みずのき」の絵画教室（1964-2001）から生まれた作品の所蔵と展示、そしてアール・ブリュットの考察を基本に据えた美術館として、2012年に開館しました。施設の創設5年目に開設された「みずのき絵画教室」は、講

師の日本画家である西垣 籌一（1912-2000）の丹念な指導によって、重い知的障害のある人の中に眠る創造性を発見、成長させ、1990年代に日本のアール・ブリュットの草分け的存在として注目を集め、2万点を越える絵画作品が生まれました。



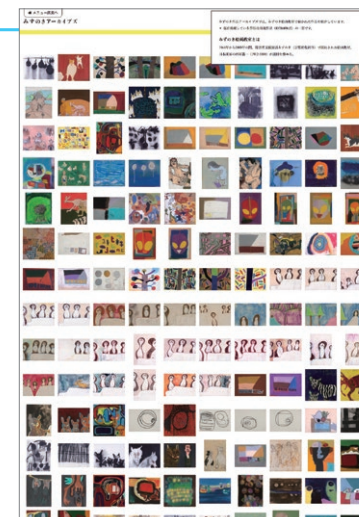
撮影：阿野太一

## ● みずのき美術館のアーカイブウェブサイト

### みずのきアーカイブズ

## 60年の歴史と膨大な作品

みずのきの絵画活動で生まれた膨大な数の作品をアーカイブ。みずのきが歩んだ約60年を時系列でまとめ、そこから作者や作品を探すこともできる。2016年には新収蔵庫への作品の移動も完了。



## ● みずのき美術館のアーカイブ

2012年10月 みずのきの施設内に作品収蔵庫を整備。

2014年4月～ 日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展2014-2015「TURN／陸から海へ（ひとがはじめからもっている力）」のローカルプロジェクト（自主企画）としてアーカイブに着手。

2015年4月～ 自主事業としてデジタルアーカイブ事業を継続。作品ページを新たに公開\*。（絵画教室時代の作品約800点を公開）

2016年4月～ 日本財団助成事業としてアーカイブ事業を継続。作品の収蔵環境の整備に着手する。また京都市立芸術大学が特別研究の一環としてアーカイブに協力し、絵画教室時代の画用紙作品（19,000点）の撮影を担当（～2018年8月）。タブロー作品（約800点）は写真家の金サジと麥生田兵吾が撮影。

2017年4月～ 額の津ミュージアム、はじまりの美術館と連携したアーカイブ事業が始動。新たにみずのき絵画教室以降の作品撮影も着手。

※閲覧はみずのき美術館内でのみ。





# 鞆の津ミュージアム

住所：広島県福山市鞆町鞆271-1 運営：社会福祉法人創樹会

## ● 鞆の津ミュージアムとは？

広島県・鞆の浦に遺る築約150年の醤油蔵を改築し、2012年5月に開館。運営母体である社会福祉法人創樹会（福山六方学園）は約60年にわたって、知的な障害のある方たちの人生を支えています。その中で、法人を利用する人たちが生み出す作品を「FUKUROKU

ART」と呼び、様々な創作支援活動を行ってきました。鞆の津ミュージアムは、障害の有無に関わらず多様な表現をお伝えすることで、個の尊厳や生き方を大切に、それぞれの存在が肯定されるような場であることを目指しています。

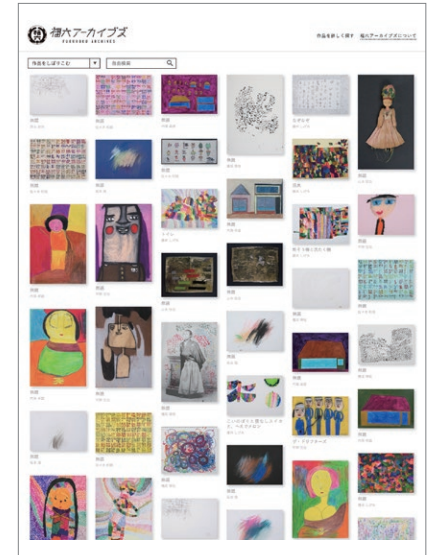


## ● 鞆の津ミュージアムのアーカイブウェブサイト

### 福六アーカイブズ

### 障害の有無に関わらず多様な表現を記録

これまでに法人内の創作活動から生み出された作品を記録し、デジタルアーカイブサイト「福六アーカイブズ」にて公開。鞆の津ミュージアムで紹介した表現もあわせて公開していく予定です。創作環境や生活の様子についても聞き取りし、表現活動に多面的な光を当てられるよう試みました。



## ● 鞆の津ミュージアムのアーカイブ

- 2017年6月 法人の各施設内で分散的に保管されてきた作品のうち、アーカイブの対象として選定したものをひとつの場所に集める。
- 2017年7月～ 作品のデータ調査・記録を開始。順次、撮影を進める。
- 2018年4月 ウェブサイト「福六アーカイブズ」公開（10名、合計300点の作品）。
- 2018年4月～ 新たに法人内外の作者と作品を継続調査。鞆の津ミュージアムにて紹介した表現やその創作活動についての聞き取りも公開予定。







# はじまりの美術館

住所：福島県耶麻郡猪苗代町新町4873 運営：社会福祉法人安積愛育園

## ● はじまりの美術館とは？

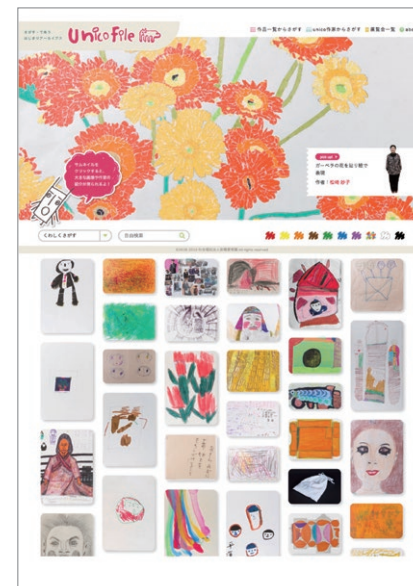
じゅうはちけんぐら  
「十八間蔵」と呼ばれる築約140年の大きな酒造蔵を改修し、2014年6月あさかあいくえんに開館。運営母体である安積愛育園は、設立から約50年にわたり主に知的障害の方たちの支援事業を担っています。2005年に法人を利用する人たちの創作

活動を支援するプロジェクト「unico (ウーニコ)」をスタートしました。はじまりの美術館では、「人の表現が持つ力」や「人のつながりから生まれる豊かさ」を大切に考え、「誰もが集える場所」を目指しています。



## ● はじまりの美術館のアーカイブウェブサイト

はじまりアーカイブス  
unico file



## 関係性から 生まれたものを記録

「unico (ウーニコ)」から生まれた作品をアーカイブし、デジタルアーカイブサイト「はじまりアーカイブス unico file (ウーニコファイル)」にて公開。また、作品を「関係性から生まれたもの」として捉え、SNSを活用し作品にまつわるエピソードも記録しました。

## ● はじまりの美術館のアーカイブ

- 2017年5月 アーカイブに取り組むきっかけとして、スタッフが未来に残したい作品を選び、法人の50周年に合わせて50種類のポストカードを作成。
- 2017年7月 アーカイブをスタート。  
45名、約650点の作品をアーカイブ。
- 2018年3月 ウェブサイト「はじまりアーカイブス unico file」を公開。
- 2018年9月～ 福島県内の作家17名をリサーチしアーカイブ。



# アーカイブとは何か

## 生きていくための記憶の伝達術

須之内元洋 (すのうち・もとひろ)

### アーカイブの起源

社会や組織にとってのアーカイブには、一体どのような意味があるのでしょうか？ また、デジタルメディア環境においてアーカイブを運用することには、どのような可能性があるのでしょうか？ いくつかの視点で整理してみたいと思います。

古来より人々は、様々なメディア（技術）を活用して、記憶を脳外に外部化してきました。そうすることによって、個人の直接的経験による記憶のみに頼って生きることから開放され、家族や民族といった、生きていくために欠かせない集団内で、世代を超えて記憶を共有することが可能になりました。そして、集団の結束を図ったり、知的資本や道具を開発・活用したりしながら、他の生物よりも優位に生きることが可能になったと言

われています。脳外に外化され、ある集団によって共有される間主観的（＝完全に個人の主観ではなく、完全に客観的でもなく、ある集団内において信じられ共有される性質）な記憶のことを、「集団的記憶」と呼ぶことにします。ここでいう「ある集団」とは、家族、集落、地域社会、職業組織、民族、国民、人類など、様々な規模の場合が想定されます。人間が記憶を脳外に保管し、記憶の貯蔵庫の仕組みや記憶の共有の仕方を工夫し、集団的記憶や知的資本を形成していく過程こそ、アーカイブの営みの起源であると考えられます。組織や集団が、自らの生存や活動持続に不可欠な記憶や知的資本を保管・共有・表現する方法を考え、そのためのメディア環境をデザインし、継続して実践しようとする営みがアーカイブです。

### アーカイブの営みの諸相

フランスの先史学者アンドレ・ルロワ＝グーラン（1911-1986）は、人類の集団的記憶の歴史を、以下の5つの時期に分類して説明しています。

- 口頭伝承による記憶の時代。無文字文化の記憶、神話、身体的記憶
- 図表や指標を含む文字による記憶の時代
- 簡単なカードが導入された時代。記憶の再編成
- 分類整理機械（パンチカード）の時代
- 記憶の電子的体系化の時代

（アンドレ・ルロワ＝グーラン著／荒木亨訳「身ぶりと言葉」〈ちくま学芸文庫〉「第9章 ひろがる記憶」より）

本稿では、一つ目の「口頭伝承による記憶の時代」に遡り、アーカイブ／集団／記憶の関係について、少し紐解いて整理してみたいと思います。古来より、ある集団が共有する集団的記憶は、その集団の統一性や個性を形成する根本的要素であり、物質的・社会的な生存のための必須条件となってきました。物質的・倫理的な日常生活の動作や慣習については、主に家族によって、幼年期に個人の記憶に刻み込まれます。ここでは、言語による伝達だけでなく、身ぶりや形<sup>かた</sup>を介した伝達が大きな役割を果たしています。一方で、日常的ではない慣習や例外的な

慣習については、家長、吟遊詩人、司祭、語り部など、記憶伝達の専門家の記憶に保管されていて、そうした専門家らが、集団の統一を維持するという重要な役割を担っていました。文字通り、生きたアーカイブです。以下、いくつかの事例を参照してみることにします。

### 事例1: 創造的再生産の仕組みとしての「ソングライン」

オーストラリアの先住民の間に伝わり受け継がれてきた「ソングライン」は、一種のアーカイブシステムとして理解することができます。「ソングライン」は、イギリスの作家ブルース・チャトウィンの旅行記によって広く知られるようになりました。それは、広大な土地を移動する際に人々を導いてくれる目に見えない道であり、彼らのアニミズム信仰の世界に体系付けられた生活の知恵のようなものだと言われています。

ソングラインの「道」は、伝統的な歌、物語、ダンス、絵画として表現され、記録されてきました。ソングラインを身につけた人は、歌の言葉を繰り返すことによって、ランドマークや水場の位置、様々な自然現象を理解することができ、広大な土地の移動をナビゲートすることができます。ここで着目したいのは、歌や物語、ダンスなどの形式をとりながら、儀礼などを通じて繰り返して記憶が再生産さ

れる点です。100%正確な再現を目指すというよりは、アーカイブを必要とする人たちが楽しみながら繰り返し「創造的な再生産」を行う過程で、世代を超えて記憶が伝承されていく仕組みです。このことは、持続的なアーカイブシステムの一要件であるように思います。

## 事例2:『古事記』と『日本書紀』の成立にみる語り部の役割

『古事記』は、712年に完成したとされる日本最古の歴史書です。一方、ほぼ同じ頃、720年に『日本書紀』が完成したとされています。『古事記』と『日本書紀』はいずれも、日本の神話や国の成り立ちの歴史を伝える歴史書として知られていますが、特に『古事記』は読み物としても人気があり、文学的にも高く評価がされています。現代においても、『古事記』の現代語訳、漫画、ライトノベル、登場する神様の図鑑などが多数出版されており、『古事記』の人気は揺るがないようです。

『古事記』と『日本書紀』のこの性質の違いはどこからくるのでしょうか。一つは、その成り立ちに手がかりがありそうです。『日本書紀』の編纂は、天武天皇がてんむてんのう舎人親王とねりしんのうらに対して命じた国家的大事業であり、政治的な影響を多分に受けながら、公式とされる資料をもとに編纂されたとされています。他方、『古事記』につ

いては、ひえだのあれ稗田阿礼が声に出して語った内容を、おおのやすまろ太安万侶が筆録し、編集されたとされています。稗田阿礼は、並外れた記憶の持ち主として知られていて、語り部として、幾多の歴史書を繰り返し声に出しながら読み込んでいたとされています。語り部には、聞いたことや読んだことをどのように覚えるか、そして、いかに魅力的に伝えるか、人を魅了して聴かせられるか、ということの力量が求められます。つまり、伝えたい事柄について、固定されたテキストとして愚直に暗記すれば良いということではなく、より覚えやすい物語として、関係する事項と立体的に関連させて覚えるということや、人を魅了する構成に物語を再構築するというような、高度な編集が行われているのです。優れた語り部は、物語を再生産しながら記憶を継承していきます。稗田阿礼の語りを元に編集・構成された成立過程が、今なお古事記が人気である理由の一つではないでしょうか。人を魅了するような表現・提示・説明を適切に取り入れることが、なぜアーカイブにとって大切なのか、現代のアーカイブに共通する問いであるように思います。

## 事例3: 職業集団や特殊技能をもつ集団の記憶

古来より、農耕、建築、冶金、治水などに求められる実用的・技術的・科学的

知識については、呪術的・宗教的なものと一体となって、それぞれの技能・職人集団の内部で伝承されてきました。こうした特殊技能の知識は、体系的に組織化されて文字に固定されることは稀で、徒弟制度と秘密保持体制の元で、集団内に限定され、伝承されてきました。いわゆる、門外不出、秘中の秘という扱いですね。こうした伝承制度と秘密保持体制によって、各集団の社会的影響力が確立され、職人さんたちの地位や立場を守り続けることができたという側面があります。知識が体系的な文字になることは稀でしたが、儀式や儀礼、かた形や流儀、見様見真似、歌や踊りなど、知識伝承のための様々な仕組みを駆使し、親方達がアーカイブの担い手となって、特殊技能の生きた知識を伝承してきたといえます。この場合、技術を外部に漏らさないという掟も、アーカイブのノウハウの一つとあって良いでしょう。何をどのように伝承していくかということは、現代の企業や組織が存続するうえでも大きなテーマであることに変わりはありません。デジタルアーカイブがその全てを担うことは難しいと思いますが、組織内の伝承の仕組みをサポートしたり、その一部を担うことに対しては積極的に貢献できると思います。

## デジタルメディア環境とアーカイブ

これまで見てきたように、アーカイブは我々が集団や社会の構成員として生きていくことと密接に関係していて、だからこそ、時代の社会構造やメディア（技術）に適応するようにデザインされてきました。20世紀には電子メディア（電話・ラジオ・テレビ）が普及して社会構造が大きく変化し、都市化がすすみ、沢山のアーカイブ施設（美術館・博物館・図書館・文書館など）が建てられました。古来より、記憶が保管・表現・共有されるのは、建築物や舞台など、具体的な場所であることが多かったようです。1990年代にインターネットが民間開放されると、社会の情報化が加速し、我々は新しいデジタルメディア環境に生きるようになりました。アーカイブ機能の一部が、デジタルメディア環境に移行しはじめたのは自然な流れです。

## メディアが現実をつくる

「メディアが現実をつくる」というフレーズには、二つの意味が込められています。一つは、ソーシャルメディアが絶大な影響力を持つようになり、フェイクニュースが選挙結果を左右しかねないという例が示すように、デジタルメディア環境における仕掛けやコミュニケーション

ンによって、文字通り現実の側がつくられるという意味です。もう一つの意味は、我々の知覚や行動様式（=つまり現実）がメディアによってつくられるという意味です。

2018年10月に劇場公開された映画『search／サーチ』は、全編スクリーンライフ（PCやスマートフォン等のモニターデバイス上の映像表現形式）のスタイルと美学を追求した作品として話題を呼びました。映画というメディアは、遠近法や写真が獲得したリアリティを拡張し、これまでになくリアルで、説得力のあるイリュージョンをつくり出すことに成功したメディアでしょう。つくり物（偽物）であることによって、むしろ限りなく現実に近づいているのです。『search／サーチ』を観終わった後では、我々は既に、スクリーンライフを現実の環境として生きていることに気付かされます。PCやスマートフォンのスクリーンに接している時間が、既に我々の現実の相当の割合を構成しているのです。我々が生きる環境がデジタルメディア化し、現実のあり方が変化しているのであれば、アーカイブの営みもデジタルメディアと無関係でいられるはずはありません。

## デジタルアーカイブの可能性

デジタルメディアとしてアーカイブを

運用する理由や利点、可能性は下記のような点にあると思われれます。

-----

- 情報コンテンツ流通の大部分が、オンラインのデジタルメディアを介して行われるようになっていきます。アーカイブをデジタル化しておくことで、人々の興味や時代に相応しいプレゼンテーションを介してアーカイブを社会に開くことが可能です。また、デジタルメディアが現実に関与する割合が増すにつれ、デジタルアーカイブの役割や存在感も大きくなることが期待されます。

-----

- アナログメディア（書籍、ポスター、フライヤー等）を含む各種コンテンツの制作システムがデジタル化しています（具体的にはAdobe Creative SuiteやMicrosoft Office）。アーカイブをデジタル化しておくことにより、記録や資料の利活用や、新たな記憶の再生産を、より円滑に実現できます。

-----

- デジタルメディアは、過去の様々な表現形式（写真、映像、テキスト、グラフィック、音声など）を、デジタルデータという一つの形式で並列に扱うことのできるメディアです。一旦デジタル化してしまえば、検索、比較、分析といった操作を、人間には真似のできない規模・速度・効率で実現します。また、データの複製・拡散のコストが限りなく小さいという点もデジ

タルメディアの特徴です。

- デジタルアーカイブの構築に際しては、それ専用の恒久的なスペースや建物の設置が必須ではなく（収蔵品保管庫や作業場等は必要ですが）、美術館や図書館といった建築物の設営・維持に比べれば、圧倒的に低廉なコストで実現することが可能です。センサーやカメラ等の入力デバイスの進化により、高品質に対象を記録するためのコストも下がってきています。20世紀であれば自分たちでアーカイブを持つことを考えもしなかった組織や集団が、今では自分たちで自分たちのためのアーカイブを運用することが可能になっています。

-----

- 多様な組織の活動分野／表現領域／メディア形式を横断した資料の検索と比較、アルゴリズムによる大規模な資料分析など、アーカイブの新しい活用法の確立が期待されています。また、個々のアーカイブが垣根を超えて連携し、社会に対してプレゼンテーションを仕掛けていくような展開も期待されます。

## 福祉施設のデジタルアーカイブ

福祉施設のアーカイブに限りませんが、デジタルアーカイブには以上のような様々な個別の展開が期待されます。この

本で紹介する3館のアーカイブの営みを拝見するだけでも、施設や美術館の運営形態や理念、これまでの組織の歩みなどが反映され、それぞれに異なったアーカイブ構築の目的やプロセス、アーカイブへの期待があることに気付かされます。福祉施設における表現活動のあり方に関する検証、施設の歩みと社会との関係への理解、施設で制作されてきた作品やその制作環境に対する理解、作家や作品の紹介を通じた社会への問いかけ、周辺地域の作家や作品の紹介を通じた公共の創出など、デジタルアーカイブに見いだせる意義は様々です。

何をどう記録するのか、記録を社会へどう開いていくのかを常に問いながら、アーカイブが次の時代の福祉施設の活動を支える存在になっていくことを期待しています。単に従来のアーカイブをデジタルに置き換えるということだけでなく、デジタルメディア環境と人との関係の中にアーカイブをデザインするという視点を持って、関係する様々な立場の人たちとともにデジタルアーカイブの仕組みを考えていけたらと思います。

すのうち・もとひろ：1977年生まれ。札幌市立大学デザイン学部講師。ソニー株式会社、サイボウズ・ラボ株式会社勤務を経て現職。メディア環境学、情報科学、音の環境学の分野で研究を行うほか、デジタル・アーカイブをはじめとした各種デジタルメディアの設計・開発、メディア・アートの実践を行う。



Chapter 1

# 作品を 整理しよう!

アーカイブの一步は資料の整理から。  
ここでは、作品や関連する資料を  
整理する方法を紹介します。

## 目的と方針を決める

はじめに、作品の保管状況や数量・種類などを大まかに把握したうえで、アーカイブをする目的（なぜ）と方針（どのように）を設定しました。それにとまない、関わるスタッフ同士での話し合いが必要となります。設定した目的によっては、絵や立体などの美術作品だけでなく、作者の特性や制作背景、展覧会の履歴など「物」以外のさまざまな情報を集める場合もあるか

もしれません。また、デジタル機器を使用した写真や映像の撮影・録音、年表の作成、資料の保存、聞き取り調査など、どのような方法で残すのかによっても、データの永続性や管理の利便性、作品や作者の様子が伝わる視点や精度が変わってくるでしょう。私たちはこうしたことを頭に入れつつ、それぞれの目的と方針にそった記録方法を採用しました。

### 3つの美術館のアーカイブの背景・目的・方針は？



#### CASE 1

### みずのき美術館

**背景** 「みずのき絵画教室」（1964-2001）時代に制作された絵画作品は、長年にわたり、障害者支援施設・みずのき内の温湿度管理のない屋根裏スペースで保管され、適切な環境を整備できているとはいえない状態でした。

**目的** 故・西垣 篤一<sup>ちゅういち</sup>が講師を務めた「みずのき絵画教室」で生まれた、約2万点の絵画作品の保管環境の整備と関連する資料のデータベース化を通し、所蔵作品及びみずのきにおける絵画活動の研究につなげる基盤を整えること。

**方針** 絵画活動を年表にまとめることを軸に、所蔵作品、関連資料、オーラルヒストリー（証言や後述の記録）を段階的に記録。



#### CASE 2

### 鞆の津ミュージアム

**背景** これまで、母体となる社会福祉法人創樹会の各施設での日常から生み出された作品は、創作現場や倉庫で分散的に保管されてきました。そのため、活動の全容把握は難しく、現物が失われる可能性にも直面していました。

**目的** 作者の「生きた証」を残し、伝えること。

**方針** いくつか設定した基準のもと、作品を選定・調査・記録。あわせて、作者本人や支援者・家族など関係者からうかがった創作についての聞き取り情報も保存する。



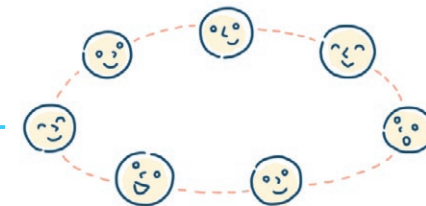
#### CASE 3

### はじまりの美術館

**背景** 母体の事業所で行われていた創作活動の中で生まれた作品は、長年にわたり整理ができていませんでした。作品を事業所だけに留めておくのはもったいないというスタッフの思いと、美術館ができたことで作品を紹介する機会が増えました。

**目的** 作者の活動や作品を記録・発信し、作者と社会をつなぐこと。またスタッフが改めて、作家や活動の意義を振り返る機会のため。

**方針** 特に大切にすべきだと考えたのは、作者と直接関わるスタッフとの関係性。まず、作者と関わるスタッフが残したいと思う作品を優先して作業にあたりました。



# 対象を決める

アーカイブにかけられる時間や予算は限られているため、記録すべき対象の種類や範囲をまずは決めなければなりません。はじめに思いつくのは絵画や彫刻といった「作品」ですが、私たちの事業所では、必ずしも美術の文脈を想定して制作されたわけではない表現も生まれており、何を「作品」とみなすかは悩ましい問題です。また、「作品」を記録する場合でも、その中からどれを選ぶのかと

いう判断基準や理由にも、目新しさ・受賞歴・選定する人の好みなどさまざまな要因が関係するでしょう。さらに、作品以外の資料を集めるにしても、何をどのくらいと決めるのは簡単な判断ではありません。美しさや重要性に対する考え方は人それぞれ異なるからです。そのため、取り組むチームのメンバー間で議論や話し合いを何度も行いました。



## 3つの美術館のアーカイブの選定基準とアーカイブをする範囲は？



### みずのき美術館

選定基準

第1期：「みずのき絵画教室」時代の絵画と関連資料  
第2期以降：絵画教室終了以降の作品、みずのき美術館展示作品

範囲

- 作品（平面）
- 絵画活動の日記、その他資料
- 展覧会履歴



### 軀の津ミュージアム

選定基準

日常生活との密接なつながり、ほかにないこと、  
出展・受賞歴、作品数

範囲

- 作品（平面・立体）
- 創作時の映像や音声
- 聞き取り
- 展覧会履歴



### はじまりの美術館

選定基準

特徴的な創作エピソードの有無、スタッフ内での知名度、インパクトの強さ

範囲

- 作品（平面・立体）
- 創作時の映像や作者ポートレート
- 聞き取り
- 展覧会履歴

**Point!** アーカイブすることを決めたら、作品の作者や関係者への事前の同意が必要です。  
(→p.40、41)

# チームをつくる

事業所の中で、ほかの業務と並行しながら一人でアーカイブの作業を行うことは大変です。担当スタッフだけでは始めることは可能でしょうが、専門性が必要な部分もあり、仲間は多いほうが良いでしょう。私たちは地元の大学、プロのカメラマンやデザイナー、アルバイト、ボランティアスタッフなど協力いただける方にお声がけ

しました。アーカイブを専門の仕事を行う「アーキビスト」という職業の方々もいます。またアーカイブに取り組むときは、知的財産権、個人情報保護法、GDPR（一般データ保護規則）などメディアや知財に関するルールや環境への配慮も重要ですので、法律に詳しい方に相談するケースを想定されても良いかもしれません。

## 3つの美術館のチーム編成

美術館スタッフのほか、各美術館によってさまざまな協力体制で進めました。



### みずのき美術館

美術館スタッフ5名に加え、撮影のみ京都市立芸術大学の協力のもと行いました。

内部スタッフ



美術館スタッフ：5人

外部スタッフ



撮影：大学・カメラマン2人



開発者：1人



デザイナー：1人



### 鞆の津ミュージアム

常勤の美術館スタッフ2名とアルバイトスタッフを中心に、一部の撮影のみカメラマンの協力を得ました。

内部スタッフ



美術館スタッフ：常勤2人・アルバイト2人

外部スタッフ



カメラマン：1人



開発者：1人

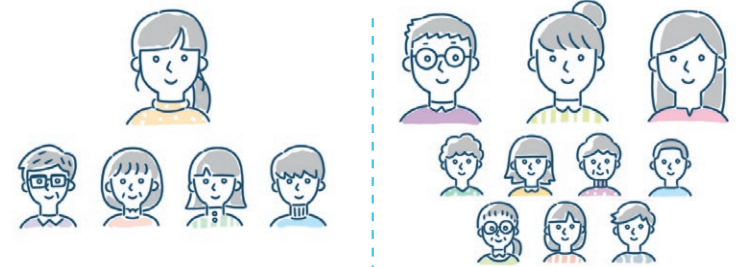
次年度以降は美術館スタッフが撮影を担当。またアルバイトは次年度より1名に変更。



### はじまりの美術館

美術館スタッフ5名と創作活動担当スタッフ10名を中心に行いました。ここでは、中心に動いたメンバーを大きなイラストで表示しています。

内部スタッフ



美術館スタッフ：5人

創作活動担当スタッフ：10人

外部スタッフ



開発者：1人



デザイナー：1人



## アーカイブの作業の流れに沿って7つの役割を紹介！

### 1 進行管理

▶ 全体を見渡しながらか進行や進捗の管理をし、調整をします。

● 3館とも美術館スタッフが進行管理を行った

**Point!** デジタルアーカイブの作成は、アナログな作業とデジタルな作業が行き交い、大量の情報を扱います。非常に複雑なため、大事な役割です。また細かな作業ルールは作業を進める中で日々更新されるので、ルールの共有も大切です。

### 2 作品整理係・撮影準備

▶ 撮影をスムーズに行うため、作品の整理と準備を担当します。

**みずのき** 美術館スタッフやボランティア2~3人

**鞆の津** 美術館スタッフ1人

**はじまり** 美術館スタッフと創作活動担当の支援員3~4人

### 3 作品素材のリサーチ・作品カード作成

→ p.32

▶ 撮影前に作品に使用している素材のリサーチと、作品カードの作成を担当。

**みずのき** **鞆の津** 撮影時に作品カードの作成も同時に行った

**はじまり** 2人1組で、1人は素材の特定や採寸などを行いながら作品の情報を読み上げ、もう1人は作品カードへの記入を行った

**Point!** 素材の特定は、展覧会に出展するときや作品の保存環境を考えるときに役立ちます。



### 4 撮影 → p.44

▶ 作品の管理や公開を行うため、作品の画像を撮影しデータとして残します。

**みずのき** 2~3人が1組となり、シャッターを押し撮影データを確認する担当、作品カードを記入する担当（採寸なども同時に行う）に分かれ行った。撮影はカメラマンに依頼したり、芸術大学や美術大学出身の美術館スタッフが担当した。

**鞆の津** 初年度はカメラマンに依頼。次年度以降は、美術館スタッフが撮影

**はじまり** 美術館スタッフと創作活動担当スタッフ2~3人で担当

**Point!** 作品を入れ替える人、カメラのシャッターを押す人など2~3人で作業を行うとスムーズ。

### 5 撮影データ管理・アップロード・入力

→ p.54

▶ 撮影したデータと、作品の情報を結びつける。作品カードの情報をウェブ上で入力したり、データをアップロードしたりする

**みずのき** 美術館スタッフが担当

**鞆の津** 美術館スタッフ2~3人で担当

**はじまり** 入力作業は創作活動担当スタッフが支援の合間に行い、アップロードやデータ管理は美術館スタッフが担当

### 6 ウェブ上のリソース環境・公開環境作成 → p.54

▶ デジタルアーカイブとして管理・公開を行うための環境をウェブ上に構築します。

● 3館ともデジタルアーカイブ設計ができる外部の専門家に依頼

### 7 ユーザーインターフェース (UI) デザイン → p.58

▶ 構築されたデジタルアーカイブを閲覧者がより使いやすくなるよう、ユーザーインターフェース\*のデザインを行います。

**みずのき** **はじまり** 技術的なデザインはデジタルアーカイブ設計の専門家に、グラフィック的なデザインは外部のグラフィックデザイナーに依頼

**鞆の津** UIデザインもできるデジタルアーカイブ設計者に依頼

※ユーザーインターフェース……ユーザーとコンピューターの間で、情報をやり取りするための仕組み。ここではおもに画面の表示方法を指す。

**Point!** 誰がやっても同じように作業ができるよう、アーカイブ構築のルールづくりとルールの共有、チームづくりが大切です。「担当者がいなくなったらやり方がわからない」ということがないように。

# 情報の調査をする

作品に関する情報を記録するため「作品タイトル」「作者」「制作時期」「材質・技法」「サイズ」などの項目を組み合わせた書式の作品カードを用意しました。各作品の管理方法は創作環境によって異なり、上記すべてのデータが判明するとは限りませんが、できる範囲で記載しておきます。また、これまでの活動日誌や

作品のことが紹介された新聞・雑誌の切り抜きなどの関連資料を読んだり、作者本人やその身近にいる関係者に聞き取りをしたりすることで、物に向き合うだけではわからない創作時のエピソードや作品の意味など、表現を理解するために重要なヒントを得られるかもしれません。

## 収集するさまざまな情報の例

### ● 作品の基本的な情報

はじまりの美術館で使っていた「作品カード」。

各作品に1枚ずつつくり、あらかじめ通し番号を付け、その番号を作品固有の番号にしました。

記載した情報はExcelに入力し、作品カードは作品番号順にファイルで保管しています。

1	作品区分	平面 (ドローイング・タブロー)・立体・その他	9
2	作品番号	112	
3	作品タイトル	りんご	
4	作者	山田 太郎	
5	制作時期	2010年7月	
6	材質・技法	画用紙、クレヨン、水彩絵具	
7	サイズ	H 297 mm × W 210 mm × D      mm	
8	メモ・備考	額装あり (H350mm × W260mm × 30mm)、破れあり	



- 1 作品区分** 作品の区分に丸を付ける。
- 2 作品番号**
  - 通し番号 (1, 2, ……)
  - 作者ごとにイニシャルを頭に付けて管理 (TY1, TY2, ……)
  - 作品の形態で記号を付ける (Ga1, Ga2, ……)
- 3 作品タイトル** タイトルがわかる場合に記入。  
タイトルの決め方も記録されているとなお良い。
- 4 作者** 作者名を記入 (最初から作品カードに印刷しておいてもよいかも)。
- 5 制作時期** 制作された時期を記入。制作期間が長いものは「2010年3月～2012年5月」というように記入。
- 6 材質・技法** どのような素材や技法でその作品がつくられているかを記入。  
支持体 (作品の基盤になっているもの)、  
描画材 (使っている画材) の順で書くのが一般的。
- 7 サイズ** 高さ、幅、厚さ (奥行き) の順で記入。  
画用紙の作品など厚みの記入は不要の場合も。
- 8 メモ・備考** 額装の状態や作品の状態、出展歴などを記入。  
その他、作品の特徴など気づいたことを自由に。
- 9** 撮影時に「↑」が書かれたカードを置いて、作品の天地を表すため、何も記入しない (→p.50)。

**Point!** 作品カードの書式を決めたり、作品に関する情報項目の選定をしったりする際は、下記URLにある情報を参考にすると考えやすいと思います。

「ミュージアム資料情報構造化モデル」

(東京国立博物館 博物館情報処理に関する調査研究プロジェクトチーム)

<https://webarchives.tnm.jp/docs/informatics/smmoi/>

## ● 作品の生まれた背景を調べる

各館ともに、創作背景をそれぞれ独自の方法で集めました。



### みずのき美術館

これまで「みずのき絵画教室」時代に書き記されていた創作活動の日誌や新聞・雑誌などに掲載された記事等をデジタルデータ化。また時代背景と照らし合わせながら、法人や絵画教室の活動を振り返ることができる年表を作成しました。



### 鞆の津ミュージアム

作者が暮らしている自宅や施設を訪問し、本人や家族など身近な関係者に作品の創作背景や生活の様子について取材。その聞き取りデータを文字起こして編集したのち、文書データ化しました。



自宅で創作を続ける富永武さんへ取材したときの様子（2018）



### はじまりの美術館

美術館スタッフと創作活動担当スタッフが話し合いのもとアーカイブ対象とした各作品について、スマートフォンアプリ「LINE」を使い、知っている範囲でのエピソードを投稿し合うことにより、創作背景の情報をデータ化しました。



## ● 集めた情報をデータベースにする



作品カードに記録した情報は、Microsoft Office AccessやFileMaker、Microsoft Excelなどのファイル型データベースを利用し、まとめておくともよいかもかもしれません。アーカイブ公開用のウェブサイトを作成しない場合でも、このデータが作品の検索・管理に役立ちます。外部非公開のウェブ型データベース（WordPressなど）を利用することもできます。またウェブサイトを作成する場合は、このデータを参照しながら作品情報をウェブページに入力していくこともできます。

#### Point!

Excelは身近なソフトウェアですがデメリットもあるので注意しましょう。

[Excelを使うときに気をつけること]

- 情報入力フォーマットの一貫性の担保が難しい。
- 複数メンバーによる共同情報編集が難しい（クラウド上のスプレッドシートであれば可能）。
- ファイルのコピーが複数つくられ、最新のものが分からなくならないように留意する必要がある。
- ファイル内の個別の作品情報の作成・更新日時の管理が難しい。

# 作品の管理をする

アーカイブする資料や作品の保管方法はさまざまですが、ここでは主に作品の保管方法を紹介します。資料や作品の保管場所は温湿度の管理ができて、日光が入らず、作品検索の容易な収納があるのが理想ですが、物理的・金銭的に困難な部分も多く、その実現度は施設ごとに差があると思います。収蔵庫を新設できればよいですが、既存の保管場所でもそれぞれの状況に応じた、できる範囲での工夫

があります。例えば、温湿度計・換気扇・空調・遮光カーテンの設置、作品保管箱の種類を統一、作品サイズ別に棚を設置するなどです。

アーカイブ作業では作品の検索を容易にするため保管箱に番号を付けたり、作品に通し番号を付けたりするので、作品管理方法の検討と並行して収納方法を決定するとよいかもしれません。



みずのき美術館の所蔵作品の収蔵庫（障害者支援施設・みずのき内）

## 平面作品の保管方法を紹介！

### ● 準備するもの



**作品の間に挟む紙**…画用紙作品の場合は重ねて保管するため、作品同士の間に紙を挟み、互いの干渉を防ぎます。「薄葉紙」や「グラシン紙」などを使用。



**白手袋**…「スミス手袋」と呼ばれる綿素材の白い手袋。作品に皮脂や汚れが付着しないよう、作品を触る際には手袋を付けましょう。ただし、すべりやすくなるので注意。



**中性紙**…中性から弱アルカリ性域の紙で長期保存に適しています。みずのき美術館では作品の劣化を防ぐため、画用紙作品とタブロー作品はこの紙で包んで保管しています。（製品名：ピュアガード45）



**温湿度計**…作品を収蔵する場所は温度と湿度を一定に保つのが理想。温湿度の変化を見るために収蔵場所に設置します。温湿度を紙に自動記録するタイプのものだと変化に気づきやすいです。



**保管箱**…画用紙作品をまとめて収納する箱。ダンボールでもプラスチックでもどちらでもよいと思いますが、作者やサイズごとに箱をわけて積み重ねられるよう、蓋付きのものがベスト。長期保存に適した中性紙素材のものもあり、ネット上で購入可。

### ● 保管場所



#### みずのき美術館

母体の福祉施設内に収蔵庫を新設し、作品サイズに合わせた棚に保管。



#### 鞆の津ミュージアム

これまでにつくられた作品の大部分は、法人内各施設の創作現場に設置されている作品棚で分散的に保管。そのほか、施設の中で現在使用されていない部屋を一時的な作品倉庫として利用しています。



#### はじまりの美術館

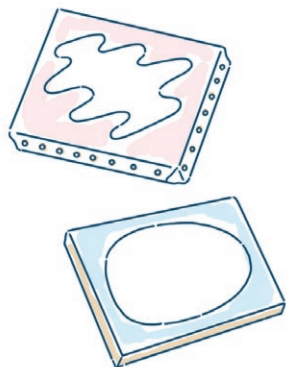
関連法人の空き部屋を借りて一時的に保管。将来的には美術館からも事業所からも距離がほどよく温湿度が適切な環境を整えて保管できる倉庫がほしいです。

## ● 保管の方法

はじまりの美術館の保管の例。

作者ごとに箱に入れたり、サイズごとに箱に入れたりそれぞれのケースによって保管しています。

### 厚みがあるキャンバスやパネル作品



1. 中性紙で包む  
もしくは額装



2. 縦に収納する

### 小さい平面作品

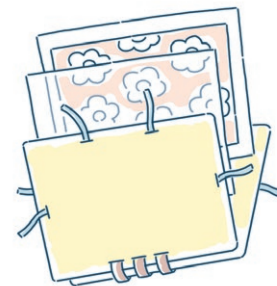


1. 薄葉用紙またはグラシン紙に  
1点ずつ挟んで箱の中へ



2. 水平に収納する

### 箱に入らない平面作品

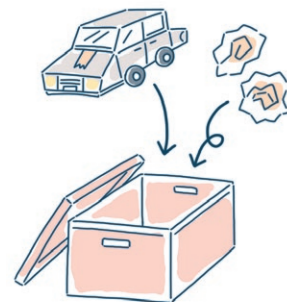


1. 1点ずつ薄葉紙に挟み、  
カルトンに挟む



2. 水平に収納する

### 立体作品



1. 隙間に緩衝材を入れながら木箱または  
中性紙のダンボールに入れる



2. 水平に収納する

#### Point!

みずのき美術館では作品の収蔵場所を管理するために、作品情報を集める作業と同時平行で下記のような作業を行いました。

- 保管されている箱（保管箱）に番号をふる：箱No.を決め、保管箱側面に記載。
- 保管箱ごとに作品を数える：誰の作品がどのサイズ（四つ切・八つ切・不定形）で何枚あるか、数えて箱側面に記載する。また作品のコンディションや注意事項を書き込む記録紙も保管箱ごとに作成。
- 作品付番：作品の通し番号を作品裏面に鉛筆で薄く小さく書き込む。

# 作者から同意を得る

3館は、作品や作者の情報をどのように管理したり公開したりするかを作者と相談しました。作品の「著作権」は、その作品を生み出した作者にあります。それとは別に、作品の「所有権」も作者にあるのか、それとも活動を行っている法人にあるのか、事業所によって考え方も異

なるので整理が必要となりました。事業所によっては、利用をはじめの段階で契約を交わすところや、1年に一度契約の確認を行うところもあるかもしれません。大切な作品を、作者や保護者と、ひとつずつ丁寧に確認を行うことが大事だと感じました。

## 作品のアーカイブに関する、権利と同意

### ● 作品の権利のこと

#### [著作権とは?]

知的財産権の一種で、思想や感情を創作的に表現した著作物（＝文芸・美術・学術）を保護する権利のこと。

#### [所有権とは?]

特定の物を自由に使用・収益・処分することができる権利のこと。

### ● 作品をアーカイブサイトで公開するときの同意の流れ



## はじまりの美術館

利用者の方と作品の公開に関する「同意書」を作成



口頭で事業の概要を説明して内諾をもらう



ご本人やご家族に「同意書」に記入・サインをもらう



## 同意書作成例

はじまりの美術館では、著作権に関する書籍などを参考にして同意書を作成しました。作者本人や創作した作品の情報を、写真に撮ること、ウェブ上に集積すること、公開すること（p. 54、58）などに関して同意をいただきました。

### 「はじまりアーカイブ unico file」の掲載に関する同意書

社会福祉法人安積愛育園（以下、「わたし」といいます。）と安積ウニ子（以下、「あなた」といいます。）とは、ウェブサイト「はじまりアーカイブ unico file」（以下 unico file といいます）への掲載について、以下のように同意書を交わします。作品は別紙記載のものとします。

#### 記（内容）

#### 【ウェブサイトへ掲載する許可】

第1条 あなたは、あなたの作品を unico file に載せることを許可します。  
あなたは、あなたの写真を unico file に載せることを許可します。

#### 【個人情報の取り扱い】

第2条 あなたは、あなたの以下の情報について載せることを許可します。  
（載せてよい情報には「○」、載せて欲しくない情報には「×」を記入してください。）

（○）氏名またはペンネーム「」  
（○）居住地（市町村まで）（○）生年（○）利用事業所名  
（○）作家顔写真（○）作家キャッチコピー「」

#### 【デザイン使用、作品貸出に関して】

第3条 外部から作品の借用依頼もしくはデザインとして使用依頼があった場合、貸出・使用について前向きに検討します。その際、unico があなたと外部との仲介となることに同意します。（貸出・使用の条件等お知らせします。契約や金銭の発生する貸出等に関して別に協議をします。）

#### 【その他のことについて】

第5条 この同意書に書かれていないことについて、直すこと（変更）や足す（追加）べき問題ができた場合は、あなたとわたしは、お互いに誠意をもって、丁寧に話し合っ、解決にあたります。

以上、unico file に関して同意がなされた証明としてこの同意書2通を作成し、あなたとわたしがそれぞれ住所や名前を書き、印鑑を押して、1通ずつ保管するものとします。

平成30年 12 月 / 日

わたし 【住 所】 郡山市安積町笹川字経垣 52

【氏 名】 社会福祉法人 安積愛育園

あなた 【住 所】 福島県郡山市00町00 00-00

【氏 名】 安積 ウニ子



Chapter 2

# デジタル アーカイブを つくろう!

アーカイブをデジタル化し、ウェブサイトで公開することでより多様な可能性が開けます。

# 作品の画像データを用意する

なぜ作品を撮影したほうがよいのでしょうか。もし作品が失われてもデジタルデータとして残せるため、また直接作品を見られない人にも伝えることができるためだと私たちは考えました。撮影する方法とし

ては、大きくわけて「自分たちで撮影する」か「外部のカメラマンなどに依頼する」の2つがあります。ここでは主に自分たちで撮影するための方法を、「簡単編」と「本格編」にわけて紹介します。

## 3つの美術館の撮影方法



### みずのき美術館

京都市立芸術大学の協力を得て、先生と学生がチームとなって大学内で撮影したもの、カメラマンに依頼してみずのき（施設）内で撮影したもの、美術館スタッフが施設内で撮影したものなどがあります。



### 鞆の津ミュージアム

初年度の撮影は、人手の問題や技術的にわからないこともあったため、プロのカメラマンにお願いしました。次年度以降は、アーカイブを持続可能なものにするためにも、いろいろと試行錯誤しながら、美術館スタッフで撮影をしています。



### はじまりの美術館

予算がなくても自分たちでアーカイブを継続できるように、また公募展への応募用写真や製品の写真を撮るためにもカメラの技術を身に付けたいと考え、創作活動の担当スタッフとともに撮影を行いました。

# 作品を撮影する

## 【簡単編】

ひとりで作品の撮影といっても、スマートフォンをはじめ、コンパクトデジタルカメラや、本格的な一眼レフカメラまで、その方法はさまざまです。ただし、どんなカメラで撮影を行う場合でも、気をつけること

の基本は、おおむね同じ。高価なカメラがないからといって、撮影をあきらめることはありません。ここでは、スマートフォンやコンパクトデジタルカメラでの撮影のポイントを見ていきます。

撮影ポイントは次のページで

## スマホで撮影



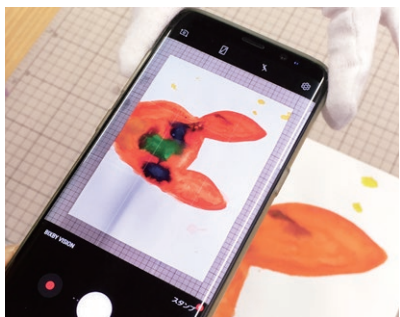


## ● 注意点

どんなカメラで撮るときも応用できる、撮影のポイント！

### ① 垂直・水平を意識

作品は真正面から撮影。その際、画面の中で作品が垂直・水平になるように意識します。スマートフォンやカメラの機種によっては、グリッド（格子状の線）を表示できます。方眼紙などマス目のあるものを作品に敷くとベスト。



### ② 自分の影を入れないように

光源の前に立たないようにしましょう。影が入ると作品の色や印象が大きく変わります。

### ③ 平面作品は、裏面も撮影

裏面も撮影しましょう。タイトルや日付などの記載がある場合はもちろん、ない場合も、素材や作品状態の記録として大切な情報となります。

### ④ 立体作品はいろいろな角度から

立体作品はひとつの角度からだ作品の全貌が伝わらない場合もあります。作品の特徴が伝わるよう、前後・左右・斜めなどたくさん撮影しましょう。

### ⑤ 撮影環境に注意！

大きな窓の近くなど自然光が入り、明るさが十分に確保できる場所で撮影しましょう。日光が直接当たる場所は影が強く出てしまうので避けたほうが良いでしょう。撮影が複数日にまたがる際や、長時間撮影をする場合は、天候や時間によって明るさが変わるので注意。できるだけ同じくらいの明るさのときに撮影するのがおすすめです。

#### Point!

ストロボ撮影の機材がある場合

自然光が入らないことがベスト。自然光が入ると撮影する時間によって色や光の量が変わってしまいます。また、色のついた壁やカーテン等が被写体の近くにあると、ストロボ光が色を反射してしまい、被写体が色被りしてしまいます。

### ⑥ 2～3人で分担すると効率よし

1～2人で作品を入れ替え、1人はシャッターを押すという流れで、慣れてくると1日で200～300枚ほどのペースで撮影できます。

### ⑦ 撮影状況を記録しましょう

撮影開始時間、終了時間、撮影の完了した作者や作品番号などの情報をメモしておく、撮影の重複が起こりません。編集や加工作業がスムーズになります。

## ● 作品撮影の良い例・悪い例

より良い撮影のポイントと、望ましくない作品写真の例。

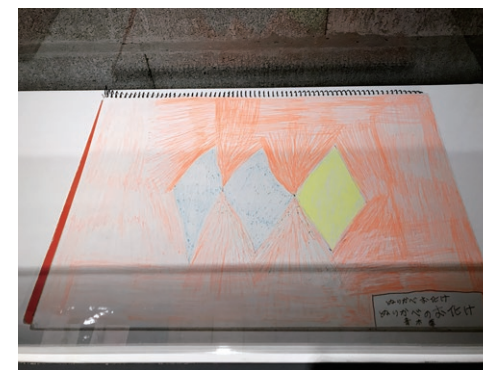
### ○ 良い例

- 均一な光が当たっている
- 真上から撮影している
- 同じサイズの作品を連続で撮影するときの目印がある
- 作品カードを入れている
- 作品の天地（向き）を表す矢印のカードが置いてある



### ✕ 悪い例

- 光にムラがある
- 作品が斜めになっている
- 光が反射している
- 影が入っている
- 作品についての情報が少ない



# 作品を撮影する

## 〔本格編〕

外部に撮影を依頼する場合、撮影道具や機材はカメラマンが持っていますが、自分たちで撮影する場合は機材を揃えます。必須となるのは「カメラ」と「レンズ」。その次に必要なのは「三脚」「カラー

チャート」「ストロボ」など正確に撮影するための道具です。

※今回のプロジェクトでは寄付金や助成金を活用して購入しましたが、用途と予算に応じて少しずつそろえていきました。



- A 作品はカメラレンズに対して平行にしよう。イーゼルを利用すると良い。
- B 作品の取り扱いの際は、白手袋を。 C 外光を防ぐ暗幕。
- D 色むらや色温度に影響するため、撮影空間はなるべく黒色で、撮影者の服も黒に近い方がベター。

## ● 撮影に使う道具

### 1 カメラ

レンズ交換式の一眼レフ、またはレンズ交換式ミラーレスカメラが望ましいです。さらに絞り、シャッタースピードをマニュアルで操作でき、液晶があるものがよいです。

### 2 レンズ

解像度が高く接写ができ歪みが少ない「マクロレンズ」(左)と、大きな作品の撮影に役立つ「広角レンズ」(右)の2種類のレンズがあるとよいです。

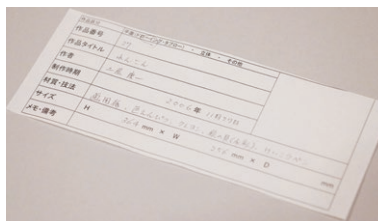


### 3 三脚

カーボン製で高さ1,500mm以上がよいです。水平器などがついていると、なお使いやすいです。足の位置は印を付けるなど常に定位置で撮影しましょう。

### 4 作品カード

作品の情報を事前に記したものを、作品と一緒に撮影。



### 5 カラーチャート

写真の色彩再現性をチェックしたり、色の自動補正をするためのもの。作品と一緒に撮影。



### 6 ストロボ

内蔵のフラッシュ以外に、主に大型(モノブロックストロボ)と小型(クリップオンタイプ)の2種類があります。同じものをスタンドに取り付けて2つ用意すると、安定した光で撮影できます。



### 7 リモートリリース

カメラのシャッターボタンに取り付け、離れた場所からシャッターを切ることができる道具です。手ブレが起きにくくなります。



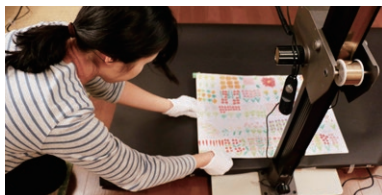
### 8 アンブレラ

ストロボの光を拡散させるもの。光が広がり、柔らかくなります。

## ● 撮影の手順

### ① 作品をセットする

カメラレンズに対して水平垂直になるように作品をセットします。



### ② 一緒に撮影するものを用意

撮影できる範囲に、作品カードやカラーチャートを設置。



### ③ ピントを合わせる

プレビュー拡大機能を使って、マニュアルでピントを合わせます。

(自動でピントを合わせると意図しない場所にピントが合うことがあり正確に撮影できません)



### ④ 絞りを十分に絞る

立体作品の場合は、絞りとピント位置の複数の組み合わせで撮影しておきます。



### ⑤ シャッターを切る

レリーズやパソコンなどを使ってシャッターを切ります。カメラについているシャッターボタンを押すと、手振れしやすいので注意。



### ⑥ 作品を入れ替えて撮影を続ける

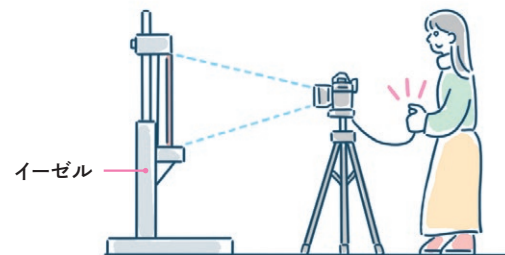
近いサイズの作品が続くときは、マスキングテープなどで印をつけておくとスムーズ。



## ● 各作品により推奨する撮影環境

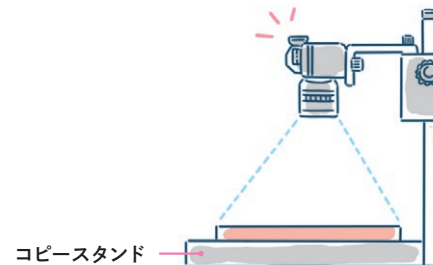
### キャンバスやパネル

厚みのある平面作品などは地面に対して垂直になるようにイーゼルなどに固定して、撮影を行います。



### 画用紙など

画用紙などに描かれた作品は地面に対して水平になるように置き、カメラはコピースタンドなどに固定して下向きに撮影します。



### 立体作品

単色の布や紙を台の上や後ろに設置して、作品以外の背景を整えてから、作品を置いて撮影します。

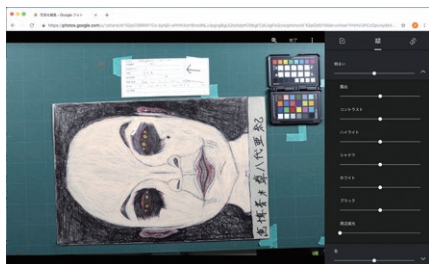


# 撮影した画像を加工する

撮影環境（カメラ、レンズ、光源など）や閲覧環境（モニター、ソフトウェア、周辺光など）によって、撮影画像の明るさや色が作品実物と異なって見えることがあります。このような場合には、画像の加工（色補正）を行いました。ここではアプリなどで簡単に画像の色を補正する方法と、現像ソフトを使用する方法を紹介しま

す。補正した画像は別ファイルとして保存し、補正前の元画像は上書きしないようにします。また、補正の作業をする際は、可能な限り実物の作品を参照しながら行うと良いです。本格的な色の判断には、モニターの性能や、確認時に作品を照らす照明も関係します。

## 簡単な方法



Google フォトなどのクラウドでは、画像の管理ができるとともに、簡単に作品のトリミングや色味の調整をすることができます。色の調整は、なるべく自動ではなく、手動で行なうと作品の雰囲気を残すことができます。またパソコンやスマートフォンの既存のアプリで画像補正ができる場合もあります。

## 本格的な方法



RAW形式<sup>\*</sup>で撮影した画像の管理・編集には、Adobe社のLightroomという現像ソフト（有料）がおすすめです。カラーチャートを元に作成される「現像プロファイル」を利用してRAW画像の現像を行うことで、自動で正確な色を再現できます。大量の画像を効率よく扱うことに長けています。

<sup>\*</sup>RAW形式……RAWとは「未加工」「生」の意味。カメラ内部で現像処理が行われる前の豊富な情報を含む画像形式のこと。

## ● 色味を構成する3要素

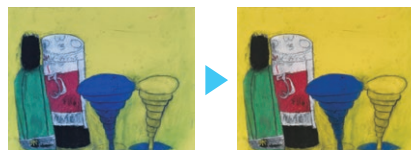
手動で色補正する場合や自動補正だけで上手く色が合わない場合、明度（明るさ）・色温度・彩度（鮮やかさ）の3つの項目を調整していきます。現物とデータでどの要素が違っているのか、判断しながら作業すると良いでしょう。

### 明るさ



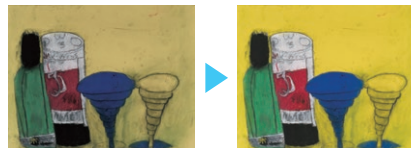
色の明るさを変えたい場合は「明度」（露出や露光量という場合も）を調整します。パソコンのモニターを周辺環境に適した明るさ・コントラストに設定すると適切な明度を判断しやすくなります。明度が高いと、明るく白っぽい色になります。

### 色温度



白やグレーの色味が合わない場合「色温度」を調整します。色温度は青色から黄色のグラデーションになっています。白やグレーにほかの色味が被らないように、色温度設定を調整します。

### 鮮やかさ



色の鮮やかさを調整したい場合は「彩度」が関係します。彩度が高いと原色に近づき、それぞれの色がはっきりと鮮やかになります。彩度が低いとグレー味がかかります。

### Point!

- Lightroom現像プロファイル：RAWデータを現像する際の設定を定義するもの。作品を撮影する環境にてカラーチャートをRAWで撮影すると、Lightroomで適切な現像プロファイルを自動作成することができます。その現像プロファイルを利用して自動現像したうえで、実物を見ながら微調整を行うようにすると、最も効率が良いと思います。
- カラープロファイル：色空間（扱える色の範囲）の情報を定義するもの。画像データに適切なプロファイルを埋め込んでおくことで、異なるOS、写真編集ソフト、ブラウザ等で閲覧する際に、一貫した色表現が可能になります。撮影・編集・保管時には、より広い色空間をもつ「Adobe RGB」や「ProPhoto RGB」、ウェブへのJpeg画像書き出し時には、より多くのブラウザやモニターが対応している「sRGB」カラープロファイルを埋め込むと良いでしょう。

# データ管理環境を整える

ウェブ環境を構築する作業は、メディアと情報の扱いを得意とするデザイナーに依頼しました。具体的には、サーバーの準備、撮影した画像データを蓄積／公開するソフトウェア選びの相談にのってもらい、サイトのデザイン・構築、その後の改装・メンテナンスなどをお願いしています。美術館スタッフの仕事としては、収

集した作品情報のうち何を入力し、何を公表するか、どのように表記するか、分類はどうするかなどや、サイトの完成イメージを相談することがメインとなりました。ここでは、ウェブやメディアの専門家である須之内元洋さんの解説で、専門家に依頼せずにできる方法も考えてみたいと思います。

## まずはサーバーについて理解しよう！

サーバーとは、常時インターネットにつながれたコンピューターのこと。場所や時間を問わず複数人で共有しながらアーカイブの編集作業を行ったり、世界にアーカイブを公開したり、SNSや外部のシステムと連携させたりするために必要になります。サーバーにはさまざまな利用形態がありますが、ここでは有料の「ホスティングサーバー」と、「クラウド型ソフトウェア」について紹介します。



### ホスティングサーバー

ホスティングサーバーは、使用できるデータ量の上限やソフトウェアの選択、またシステムのカスタマイズの自由度によって料金が異なり、規模や利用目的に合わせて選ぶことができます。数百円から借りられるものも。ちなみに、鞆の津ミュージアムでは「さくらインターネット」のサービス「さくらVPS SSD 1G」を利用。

### クラウド型ソフトウェア

「クラウド」とは、ハードウェアを購入したり、ソフトウェアをインストールしたりしなくてもインターネットを通じて利用できるサービスのこと。資料管理やウェブ配信などに適したクラウド型ソフトウェアは、利用契約をするだけで、インターネット経由で利用できます。

#### Point!

デジタルアーカイブのシステムは、一般的に一度に大量のアクセスをさばいたり、複雑な計算を継続的行なったりすることは少ないので、それほど高性能なサーバーを必要としません。

## デジタルアーカイブの仕組み

デジタルアーカイブでは、その資料（データ）を管理・運用するソフトウェアを利用します（A）。それらをウェブサイトなどで公開したい場合は、別のソフトウェアを使用する場合も多くあります（B）。

### アーカイブを運用する団体や個人



資料のアップロードや管理 / メタデータ\*の編集

#### A データを管理・ 運用するソフトウェア

大量の資料（画像、映像、音声、書類など）を効率的に管理するソフトウェアやクラウドサービス。柔軟な検索機能を備えているものも。

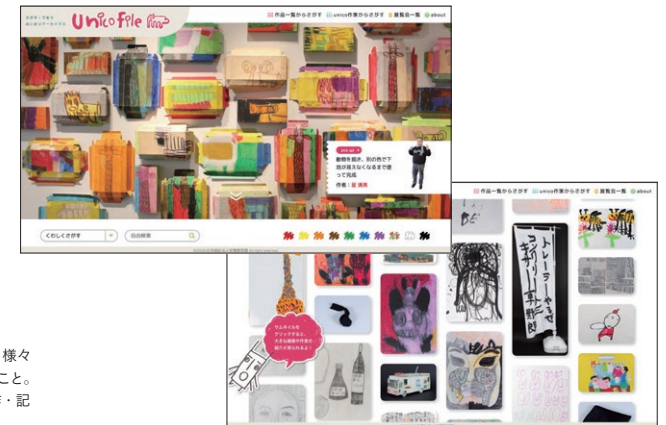
メタデータや  
資料の連携



#### B データを公開する ソフトウェア

アーカイブをウェブサイトとして公開する際に必要な、情報の編集・管理機能、見た目や使い勝手のカスタマイズ機能、配信機能等を備えたソフトウェアやクラウドサービス。

### 公開!! / インターフェースの構築



※メタデータ……資料に関する様々な属性を表現するデータ群のこと。例えば、資料のタイトル、制作・記録の日時、作者、履歴など。

「データの管理・運用」と「データの公開」に適した

ソフトウェアや、クラウド型ソフトウェアの例



手軽に利用できるクラウド型ソフトウェアや、無料で使える高機能なソフトウェアがあり、予算や運用目的に応じて選択できます。クラウド型ソフトウェアやSNSを組み合わせるだけでも、手軽なシステムが実現できます。システムのつくり込みや柔軟なカスタマイズを希望する場合、または公開ウェブサイトを丁寧にデザインしたい場合には、ホスティングサーバーにソフトウェアをインストールして使用します。必要に応じて、デザイナーやエンジニアに相談すると良いでしょう。

【機能の充実度】

- …アーカイブに必要な豊富な機能、拡張性を備えている。
- …簡易的だがアーカイブとして利用できる。
- …簡易的だがアーカイブとして限定的に利用できる。

【手軽さ】

- ★★★★…初心者向け。専門的な知識がなくてもできそう。
- ★★★…中級者向け。ウェブが得意な人ならできるかも。
- ★…上級者向け。デザイナーやエンジニアの力を借りたい!

	A データの管理・ 運用機能	B データの 公開機能	手軽さ	利用形態		備考
				インストール 型	クラウド 型	
 ResourceSpace (リソーススペース)	●●●	●	★	○	○	画像、映像、テキスト、音声、書類などさまざまな形式の大量のデジタル化資料を効率的に管理・運用するための、サーバーで稼働する無料のソフトウェア。「デジタル資産管理システム (DAM)」とも呼ばれます。有償で手軽に使える、クラウド型のサービスもあります。
 WordPress (ワードプレス)	●	●●●	★★★	○	○	効率的でわかりやすいウェブサイトの運用 (コンテンツの保管・編集・配信) を実現するための、サーバーで稼働する無料のソフトウェア。「コンテンツ管理システム (CMS)」とも呼ばれます。分かりやすいUIを備え、カスタマイズの柔軟性や拡張性が高いのが特徴です。有償で手軽に使えるクラウド型のサービスも多数あります。
Google フォト	●●	●	★★★★	—	○	写真と動画用の、クラウド型ストレージサービスです。たくさんの写真と動画を手軽に管理・共有できるのが魅力です。個人向けの写真管理・共有サービスですので、充実したメタデータの管理や複数ユーザーによる共同編集などは苦手です。似たようなサービスにAmazon プライムフォトがあり、こちらはRAWデータも管理できます。
Google ドライブ	●●	—	★★★★	—	○	個人や組織内で多種多様な資料を管理・共有できる、クラウド型ストレージサービスです。Google ドキュメント/スプレッドシートなどのアプリケーションが組み込まれ、オンラインで編集することも可能です。複数ユーザーによる共同編集、細かなアクセス制御にも対応しています。
Box (ボックス)	●●●	●●	★★★	—	○	組織内で多種多様な資料を管理・共有できる、クラウド型ストレージサービスです。メタデータ項目の柔軟なカスタマイズ、複数ユーザーによる共同編集、細かなアクセス制御にも対応しています。また、保管された資料をウェブサイトとして公開するための連携機能も用意されています。
Dropbox (ドロップボックス)	●●	—	★★★★	—	○	手軽に利用できるクラウド型ストレージサービスです。PCにファイルを保存するのと似た方法で、多種多様な資料を管理・共有できます。恒久的な保管というよりは、日々の活動やコラボレーションのための資料を保管・共有するのに適したサービスです。
Jimdo/Wix/Tumblr /Goope (ジンドウ/ ウィックス/タンブラー/ グーペ)	—	●●	★★★★	—	○	手軽にホームページやブログを作成・運用できるクラウド型サービスです。HTMLの専門知識がなくても、サイトデザイン、コンテンツ編集が可能です。デザイン作業の簡便性と柔軟性、機能の拡張性、広告の有無、無料・有料版など、さまざまな異なる特徴を持ったサービスが存在します。

ResourceSpace と WordPress がオススメな理由!

- データの管理・運用 (A) と「データの公開」(B) の、両方の目的に対して十分な機能性・操作性・品質を有しています
- ResourceSpaceとWordPressは、活発に開発が行われているオープンソースソフトウェアです。今後も継続的な機能改善・バグフィックス (ソフトウェアのバグを修正するセキュリティ対応が期待されます。また、セットアップやカスタマイズに関するメントも充実しています。
- オープンソースですので、エンジニアが仕組みを理解したり、カスタマイズし他のシステムと連携させることが容易です。また、特にWordPressについては慣れたエンジニアやデザイナーが世界中にたくさん存在しています。



# サイトのデザインを 考える

デジタル・アーカイブを公開する方法としては、ある場所でのみ閲覧できる方法と、ウェブ上で誰でも閲覧できる方法があります。いずれにしても「ユーザーインターフェース (UI)」が重要でした。「UI」は「コンピューターを扱うときに利用者が情報を受け取ったり入力したりするための仕組み」のこと。「インターフェース」を直訳すると「境界面」や「接触面」という

意味で、パソコンやスマートフォンなどの画面をイメージするとよさそうです。作者らと事前確認を行った著作権・公開許諾ルールに従って、情報の公開ポリシーを確認し、それに準じたUIデザインの検討を行うことも重要です。どんな人が、どんな目的で使うかを考えながら、アイデアを膨らませていきました。

## ウェブサイトのデザインを考えるときに整理したいこと



どんな人に  
ウェブサイトを見  
てほしいか。

どんな  
コンテンツが  
必要か。

どんな印象にしたいか。  
(例: シンプル、  
にぎやかなど)

## 3つの美術館のアーカイブサイトのコンセプト



### みずのき美術館

**みずのきアーカイブス** 現在は美術館内のみで閲覧できます。「年表ページ」と「作品ページ」の2ページに分かれています。作品ページはトップ画面で作品を一覧表示し、気になった作品を拡大表示できる仕組みです。作者ごとやサイズごとなど絞り込みをして表示することも可能です。

設計: 須之内元洋 / デザイン: 菊地敦己 (トップページ)



#### Point!

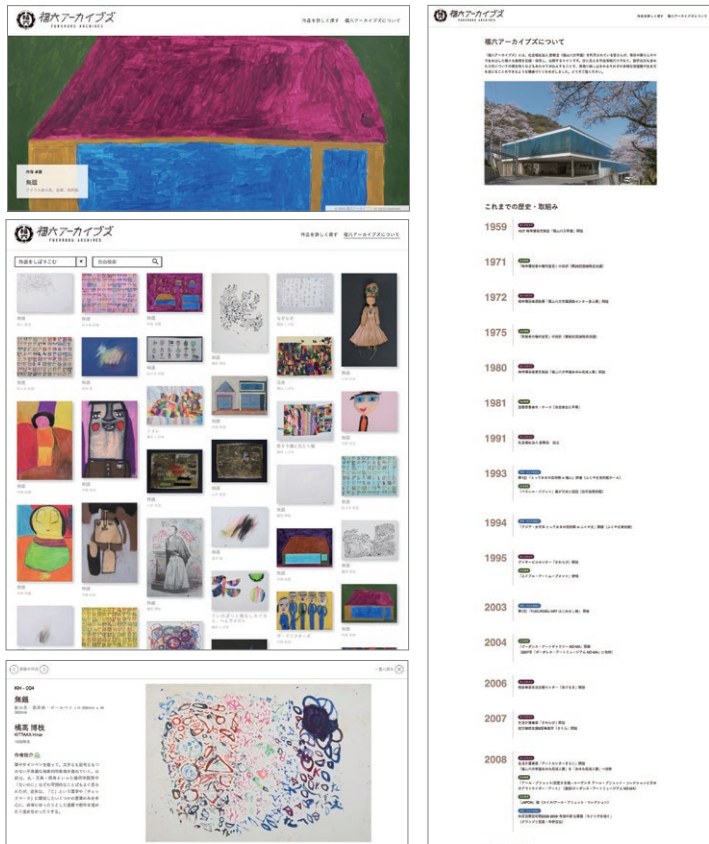
初めて使う人の気持ちを想像して、使いやすい・見やすいサイトを考えよう。



## 鞆の津ミュージアム

**福六アーカイブズ** 一画面に表示される情報を整理し、できるだけシンプルなものになることを目指しました。「作者」や「作品形式」ごとに検索ができ、それぞれ簡単な解説も見てもらえます。また、これまでの経緯がわかるよう、母体の法人における創作活動の年表も作成しました。

設計・デザイン／須之内元洋



## はじまりの美術館

**はじまりアーカイブズ unico file** 親しみやすいデザインと、知りたい情報にアクセスしやすい操作性を重視しました。デザイナーにもアイデアをもらいながら、作者の全身写真を使用し、モチーフや単語、色で検索できる機能を実装しました。知らない作品や作者に出会うことで、ここから何かが始まることを願い、検討を重ねました。

設計：須之内元洋／デザイン：ふるやまなつみ



### Point!

公開している作品の情報をどの範囲で利用できるのかを明示することも大事です。私的利用に限るのか、ダウンロードはしてほしくないのか、CCライセンス（この条件内であれば自由に利用できる）か、など。



# アーカイブを 活用する

アーカイブはさまざまな活用方法があります。例えば、作品の展示依頼があったとき、これまでは直接作品の実物を見て選んでもらうことが多かったのですが、今はアーカイブサイトを見て作品を選んだり探したりしてもらったこともあります。また、「グッズのデザインとして作品の画像を使

用したい」という相談があったときも、アーカイブサイトを見てもらいました。また、アーカイブの作業をきっかけに展示会を企画したこともありました。アーカイブをしたことで活動の幅が広がり、日々の業務の負担も減っています。

## いろいろな活用例

### 展示会を企画する

アーカイブの作業をする中で見つけた作品の共通点や気づきをもとに、展示会を企画しました。事業所の一角で小さな展示会をしたり、事業所の外で場所を借りて作品を展示したり。作品や作者を知ってもらう機会が広がります。

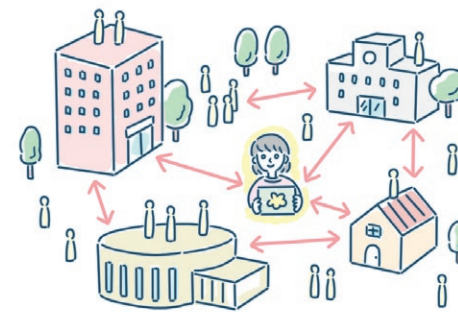


### 展示会に出品する

近年、さまざまな公募展や作品展で障害のある方の作品が募集されています。作品を展示会に出品して、多くの人に見てもらうことで、作者の可能性が広がる可能性があります。

### 製品化する

作品を撮影した画像をもとに製品化することもできます。たとえば、事業所や家庭用のプリンターを使ってポストカードをつくったり、業者に依頼してクリアファイルやシール、バッグなどのオリジナルグッズをつくったり。事業所の場合は製品の売り上げをどのように還元するか事前に確認しておくといでしょう。

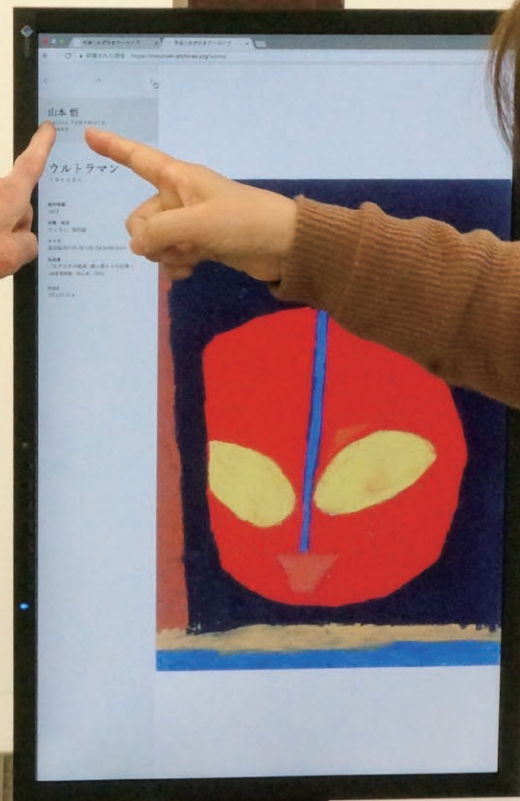


### 社会とつながる

日々の振り返りや共有にもなるアーカイブ。組織内で異動や担当の変更があったときの共有もスムーズになりそうです。またそのアーカイブ自体が、事業所と社会、または作者と社会の橋渡しになるかもしれません。

# プロジェクト の記録

地域の異なる3つの美術館の  
合同プロジェクトとして  
取り組んだアーカイブ。  
2年間の歩みの一端を紹介します。



## どうしよう、アーカイブ ～支援しながらアーカイブ なんて無理じゃない!?～



社会福祉法人安積愛育園の、アーカイブ事業のメンバー。  
左から、大政愛、岡部兼芳、鈴木愛理、佐藤雅俊、遠藤朋美。

はじまりの美術館を含む12の事業所を持ち、1997年より創作活動を取り入れてきた社会福祉法人安積愛育園。2005年からは創作活動を「unico (ウーニコ)」というプロジェクトとして展開してきました。メンバーの描いた作品は、10年以上の間、木造の古民家で管理。アーカイブ事業はその作品整理から始まりました。はじまりの美術館を中心に、通所施設で生活支援員を務めるスタッフも巻き込んだアーカイブ事業。中心に関わった5名が「アーカイブ」を振り返ります。

### 予想以上の物量をどうするか？

——アーカイブ事業を始められた経緯を教えてください。

**岡部兼芳 (以下、岡部)** 法人では、はじまりの美術館がオープンする前から、作品を保管

していた「アトリエ」と呼ばれる場所に、作品が山積みにならされていました。他所から「作品を貸してほしい」と言われても、その作品がなかなか見つからずに貸し出しができないなどの問題を抱えていて。きちんと管理をしたいけれど、日々の業務に手

一杯でなかなか手をつけられない。そうした課題があったなかで、美術館の開館を機に、作者ごとにきちんと情報を整理してこうという動きが生まれました。こうした内部の課題と、日本財団の助成事業を申請するタイミングが重なり、今回のアーカイブ事業が始まった経緯があります。

**遠藤朋美 (以下、遠藤)** 「アトリエ」の建物を解体しなければならないタイミングとも重なりましたよね。まずは作品を別の場所へ移動するところからはじめました。ですが整理をしながら片付けなければならなかった。

**鈴木愛理 (以下、鈴木)** はじまりの美術館の声かけでアーカイブ作業をはじめましたが、作品の量を考えると業務のなかでやるなんて「無理じゃん!」と思いました(笑)。支援しながらアトリエを片付けて、作品の写真撮って、データにしていくなんてできない!って。

**佐藤雅俊 (以下、佐藤)** 予想以上の量で……。最初は「アーカイブ」＝「作品の整理」という印象がありました。あの場所に保管を始めたのは10年以上前ですが、当初は作者ごとになんとなくまとめて置いていたも



片付け前のアトリエ



の、だんだんとそれも曖昧に……。

**岡部** 気づいたらダンボールで整理されていない作品がドバツと置いてあったりして。誰がもってきたのかもわからない、無法地帯のようになりました。

**佐藤** 「置いておけばいい」という安心感だけで、管理はできていなかったんです。気づいたら作品が日に焼けてしまったり、折れ曲がったり、輪ゴムやテープが溶けてしまっていたり。今回、整理をするなかで、残すべきかどうかという部分が一番悩みました。

**遠藤** これってゴミかな？ 作品かな？ っ。心苦しいけれど処分しなければいけないものもありましたね。

**佐藤** でも整理をしたことで、何が必要なのかがわかった。作品をつくった日や、誰がつくったか、素材は何か。記録が大事だということを実感しました。

**遠藤** 作品の上下とか!

**佐藤** そうそう。あと、アーカイブ事業を始める前に、法人の50周年事業でポストカードをつくりましたよね<sup>\*</sup>。その過程を経たことが「アーカイブ」がどんなもので、

何を目的とするのかイメージしやすかったと思います。

※安積愛育園の50周年に合わせて、各事業所からスタッフが選んだ50作品をポストカードにした。「メジャー」「エピソード」「インパクト」「ルーキー」という4つの観点を手掛かりに、作品の選定を行った。

## アーカイブはやっぱり大変！でも楽しい

——保管場所の片付けのほか、実際に担当された作業はどのようなものでしたか？

**鈴木** 佐藤さん、遠藤さん、私の3人は、おもに作品の選定や撮影、作品のカードの作成、データの打ち込みです。

**遠藤** 特に、私は役職的にも直接の支援業務がなかったので、データの打ち込みを担当しました。支援の現場に入りながらのアーカイブ作業は大変だったんじゃないでしょうか。

**佐藤** 無理のない範囲で分担していたので、極端な負荷はかかっていないかなと思います。苦手だったのはカメラのセッティングです。

**遠藤** いつも担当していた大政さんが、たまたまいなかったときは、セッティングだけで半日かかったこともありましたがね。

**鈴木** 全然進まなくて、これじゃ報告もできない、と焦りました。カメラに関しては「単焦点ってなに？」って感じでしたから……。

**岡部** ほかに大変だったことはありますか。

**佐藤** 同意書(→p.41)は大変でした。チェック項目をどうするか、とか。いざ、作者であるunicoのメンバー(以下、メンバー)に同意書を書いてもらうと、名前を出せない人



岡部 兼芳(おかべ・たかよし)

はじまりの美術館館長。2003年に入社し、あさあすなる荘にて生活支援員を勤め、創作活動を支援するプロジェクト「unico(ウーニコ)」に携わる。2014年より現職。アーカイブ事業総監督。

もたくさんいたのは意外でした。

**鈴木** メンバーが40代だと、その親御さんたちは60~70代。インターネットにあげることに抵抗のある世代なのかもしれません。展覧会に出すのはいいけれど、ネットに名前や顔を出すのはちょっと、というのありましたよね。

**大政愛(以下、大政)** 佐藤さんと遠藤さんはアーカイブサイト(→p.61)のデザイン会議にも加わり、キャッチコピーをつけたり、動く仕掛けをつくったり、というアイデアをもらいました。

**佐藤** キャッチコピーはスタッフみんなに考えてもらったんですが、みんな楽しそうでした。事務のスタッフが考えた「ジェンダーレスなアートの世界」なんかは絶妙ですよ。

**遠藤** <sup>たかのろ</sup>小林敬弘くんは自分で考えていました。「ちょっとまって」って何回か変えていましたけど。出てきたキャッチコピーは、コーヒーを淹れるのが好きなので、「コーヒープリンズ小林」です。

## スタッフの変化、メンバーの新たな一面

——ほかに大変だったことはありますか？

**佐藤** 一番途方にくれたのは、作品のエピソード収集です。10年以上前の作品もあるので、常勤のスタッフは異動があるし、離職したスタッフもいるし。当時の担当スタッフをつかまえて聞いてみても覚えていないこともありました。作品の整理やサイズの計測などの作業は答えがあるけれど、この作品がどのように生まれて、つくった人がどんなふう考えたか、という情報を探るのは終わりが見えない作業でした。ただ、情報を集めていくと10年以上付き合っているメンバーなのに初めて知ることも多く、その気づきはうれしかったです。「こんなものも描いていたんだ!」と。

**大政** たとえば誰ですか？

**佐藤** 土屋康一さんが亀やお寿司を描いていたのは知らなかったです。普段は植物とか、ほかのメンバーの顔を書いたりする方なので。昔のことを知ると、メンバーと



佐藤 雅俊(さとう・まさとし)

地域生活サポートセンター「バスソ」チーフ、生活支援員。2006年に入社し2017年より現職。アーカイブ事業では、作品整理から撮影、サイトデザインの企画、同意書の作成などを担当。



遠藤 朋美(えんどう・ともみ)

通所支援事業所「チエロ」アシスタントマネージャー、児童発達支援管理責任者。2007年に入社し2017年より現職。アーカイブ事業では、作品整理からデータ打ち込み、サイトデザインの企画などを担当。

思い出話で会話が盛り上げられることも。違う一面を知ることによって楽しい気持ちになります。

**鈴木** いつも色鉛筆しか使わないメンバーも、以前は水彩やアクリル絵の具を使っていたことを発見して「たまには水彩をやってみましょうか」という提案にもつながりました。

**佐藤** アーカイブ作業自体は軌道にのったとは言い難いですし、法人内部への周知もまだまだですが、スタッフの意識は変わったと思います。作品の扱いは丁寧になりました。以前は棚に並べた画用紙作品が、折れ曲がっていることもありましたが、そういうのはなくなりました。日々の支援のなかで、自分たちしかわからない情報は書きとめておこうという意識も生まれたようです。そんなに手間がかかる仕事でもないので。エピソードや作品情報を集めてもらったので、大変さがわかったんだと思います。アーカイブの大変さと楽しさを、より多くのスタッフに体験してもらいたいです。

**鈴木** メンバーさんのなかでも気にしてく

れる人も出てきました。「日付かいて」とか「タイトルはこれだよ」と自ら教えてくれることもあります。「アーカイブサイトにのるのがうれしい」とおっしゃっていました。みんなにみてもらえるのがうれしい、と。

**佐藤** アーカイブサイトの存在を伝えると、喜んでくれるメンバーは多いですね。

**大政** アーカイブ作業のなかで見つけた作品をはじめの美術館で展示したら、そのメンバーについて卒論を書きたいという学生さんが現れたこともありました。

**佐藤** その学生さんはなんども取材にきてくれて、取材を受けた彼女も喜んでいましたよ。メンバーは日頃、私たちスタッフやご家族としかほとんど関わりがないので、いろんな人とのコミュニケーションが生まれるのはありがたいです。

**遠藤** 作品があのまま倉庫に眠っていたらなかった出会いですよ。私も今回アーカイブに関われたので、名前しか知らないメンバーのバックグラウンドを知ることができました。ただ、確かにほかのスタッフへの周知は課題で、発信しなければと思います。

**鈴木** 私もアーカイブサイトを見て、はじ



鈴木愛理(すずき・あいり)

地域生活サポートセンター「パッソ」生活支援員。2016年に入社し現職。アーカイブ事業では、作品整理から撮影、データ打ち込みまで担当。



大政愛(おおまさ・あい)

はじまりの美術館学芸員。2016年に入社し現職。アーカイブ事業全体の企画・進行管理。法人の50周年記念事業にてポストカード制作をはじめ、作品整理から撮影、画像の現像、サイトデザインの企画などを担当。

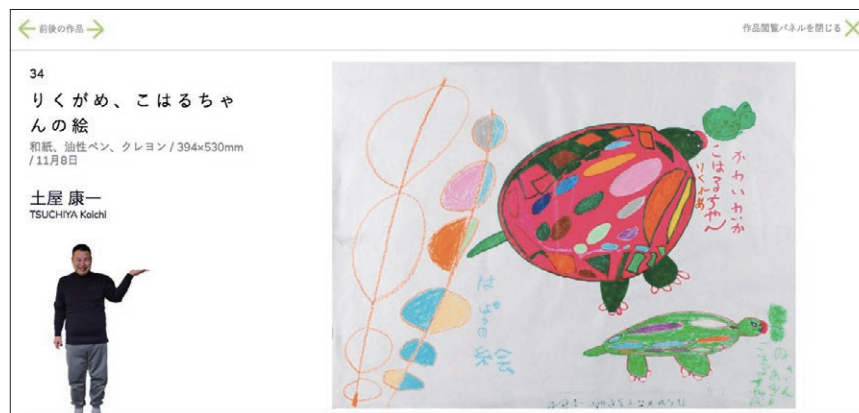
めて知った別事業所のメンバーもたくさんいました。

## 私たちがいなくなっても、残っていくもの

**岡部** アーカイブ事業をはじめの当初、どうにか法人内でも仲間を増やしたかったので、興味をもってくれるだろうかと悩みました。急に「アーカイブ」という言葉を使ってもわけがわからないかもしれない、と。

**遠藤** そうですね、「何をおっしゃいますやら」と思われるかもしれません。でも「はじまりアーカイブス unico file」のようなアーカイブサイトの例を見せたらイメージしやすいです。あと、メリットとしてはカメラ技術が学べるとかでしょうか。

それから、私たちがいなくなっても後世に伝えていけるというのは、やりがいとしては大きいですね。メンバーにとっても作品が残りますし、スタッフにとっても「私はあの仕事をしていたんだ」といえるかもしれないです。



「はじまりアーカイブス unico file」

**佐藤** 通常の福祉の業務とは違う仕事ですが、サイトにこれだけの作品が見えると、メンバーが「利用者さん」ではなく「作家さん」というイメージが強くなりました。そういう印象が変わる楽しさは感じます。実は、私たちの施設には作家として世界に名が知られている人もいる、すごいな!と誇りにつながります。

**鈴木** 私もたまに現場を離れて、撮影や



作品選定ができることが楽しかったです。

**佐藤** 作品をじっくりと見られるし、形になる嬉しさもありました。課題は、このあとどうリズムをつくって、継続していくか。

**大政** 理想は、定期的にどの作品を残す・残さないの判断を、作者本人を含めてできたらいのですが、そこまで流れはつくりきれないですね。

**佐藤** どういうふうにしたらよりスムーズになるでしょうね。日常的な作品情報を集めるなどはその都度できますが。作品の整理は、定期的に時期を決めてやっていくのがいいですね。

**鈴木** あ、この時期、作品の整理の時期だねって。

**遠藤** 行事やイベントの対応がないから2月がいいかもしれないですよ。

**佐藤** 3月に入ると人事とかでばたばたしますね。

【構成：佐藤恵美】

## 3つの美術館の アーカイブプロジェクト

日本財団の助成のもと、2017年4月からスタートした3つの美術館のアーカイブプロジェクト。2年間の合同プロジェクトはミーティングを何度も重ね、「作品とは何か」「作品を記録すること、伝えていくことはどういうことなのか」を議論しながら進めていきました。

### 2017年

4月10日	定例会議（東京）
5月29日	定例会議、みずのき美術館・みずのき視察（京都）
6月5日	定例会議、はじまりの美術館・アルパほか事業所視察（福島）
7月10日	定例会議、鞆の津ミュージアム・福山六方学園視察（広島）
8月21日	定例会議、作品撮影方法の講習（東京）
10月13日	定例会議（東京）
11月27日	定例会議（東京）

### 2018年

1月15日	定例会議、座談会下見（東京）
2月24日	座談会イベント開催
5月14日	定例会議（東京）
8月20日	定例会議（東京）
12月25日	定例会議（東京）

### 2019年

2月16日	座談会イベント開催
-------	-----------

#### 座談会

### 小さな声に目をこらす 「作品」を記録し伝えることをめぐって

全国各地でさまざまな「声」の聞き取りを通じ、他者の経験や記憶に向き合っている細谷修平（ほそや・しゅうへい）さんと瀬尾夏美（せお・なつみ）さんをゲストに迎え、生きていることを記録し伝えることについて考えた。

- 会場：日本財団ビル8階
- ゲストスピーカー：細谷修平 [美術・メディア研究者／映像作家]、瀬尾夏美 [画家／作家]
- スピーカー：奥山理子 [みずのき美術館]、津口在五 [鞆の津ミュージアム]、大政愛 [はじまりの美術館]
- モデレーター：須之内元洋 [札幌市立大学講師／本事業アーカイブ設計者]



#### 座談会

### かすかなしるしに耳をすます 「作品」を記録し伝えることをめぐって

医学書院で「ケアをひらく」シリーズを編集する白石正明さんをゲストに、気づかずに見過ごしたり、忘れてしまいかもしれないかすかな「徴（しるし）」に耳をすます方法について考える座談会。

- 会場：日本財団ビル8階
- ゲストスピーカー：白石正明 [医学書院「ケアをひらく」シリーズ編集者]
- スピーカー：奥山理子 [みずのき美術館]、津口在五 [鞆の津ミュージアム]、大政愛 [はじまりの美術館]
- モデレーター：須之内元洋 [札幌市立大学講師／本事業アーカイブ設計者]



- 主催：みずのき美術館（社会福祉法人松花苑）、鞆の津ミュージアム（社会福祉法人創樹会）、はじまりの美術館（社会福祉法人安積愛育園）
- 助成：日本財団

## 出会いのはじまり



はじまりの美術館 学芸員

大政愛 (おおまさ・あい)

社会福祉法人安積愛育園では、事業所で創作活動をはじめから約20年、「unico (ウーニコ)」という名で創作活動のプロジェクトを続けて約10年になります。「unico」は、7つの事業所でそれぞれ活動を行っており、月に一度「unico会議」という全体の会議を開いています。この会議は、各事業所から1~2人ずつ毎回十数人が出席し、製品の発注や納品、販売会などの依頼や、公募展や展覧会への出展など、法人内の創作活動にまつわる様々なことを話し合う場です。今回のアーカイブプロジェクトも unico 会議で何度も話し合い、現場で支援をしている多くのスタッフたちが関わりました。

はじまりの美術館でのアーカイブプロジェクトは「unico collection 50」と

いうポストカードのプロジェクトから始まりました。2017年、法人が50周年を迎えるにあたり、その記念事業として未来に残したり伝えたい作品50点を選びポストカードにしました。「メジャー」「ルーキー」「エピソード」「インパクト」という4つの観点から選び、これがアーカイブへの大きな一歩となりました。

本格的にアーカイブの作業をはじめたのは2017年夏です。整理、選択、調査、撮影、入力、画像加工など、アーカイブは一見「作業」の積み重ねです。けれども、それ以外にも悩み考えることに多くの時間を費やしました。特に、限られた時間や労力のなかで、今回どこまでの作品をアーカイブするかという問題にはアーカイブに関わったス

タッフみんなが頭を抱えました。そして、サイトの見せ方や機能にもこだわり、法人内部でも、また設計者やデザイナーとも会議を何度も重ねていきました。

こうしてオープンしたアーカイブサイト「はじまりアーカイブス unico file」のキャッチコピーは「さがす・であう はじまりアーカイブス」。この原稿を書いている時点で、サイトのオープンから約1年が経ちました。この期間で特に変わったことは、作品の貸し出し・デザイン使用依頼への対応の場面です。

これまでは、作品の貸し出し希望があると、まず作品を保管しているアトリエに見に来てもらうことがほとんどでした。アーカイブサイトができてからは、まずはサイト上で作家、色、モチーフなど様々な観点から作品を探していただき、そこからやりとりをはじめていきます。unicoの作品をグッズ等のデザインとして使用したいという依頼に対しても、作品を先に選んでいた、その後高解像度の画像をお渡しするというスムーズな対応ができるようになりました。

また、利用者であるメンバーと生活支援をするスタッフの関わりにも変化がありました。アーカイブを行う中で、

現在は創作を行っていないメンバーの作品や、創作を続けているメンバーの過去の作品もたくさん出てきました。これにより作者の新たな一面をスタッフが知ったり、なかなか陽の目を見なかった作品がまた展覧会展出につながったりと、広がりが生まれたように感じます。そして、アーカイブサイトに自分の作品が載ることをモチベーションにしているメンバーもいて、創作活動に対し、いい刺激や振り返りのきっかけになっているようです。

アーカイブ事業を通し、過去に創作活動に関わったスタッフが残した多くの作品や情報に触れました。その残ってきた作品や、いまま生まれ続ける作品をどうするかは、自分たち次第です。そして現在、福島県内に住む作家たちに焦点を当てた「はじまりアーカイブス fukushima file」を準備中です。障害のあるメンバーたちが生きていることを一つの形で残したり伝えたりすること。それは施設にとどまらず、広く社会につなげるという支援のひとつかもしれません。私たちがつくったアーカイブのなかで、多くの方と出会い、新しい何かが始まることを期待しています。

## あちらこちらに 「生きた証」が



鞆の津ミュージアム 学芸員

津口在五 (つぐち・あきご)

そもそもそんなことができるかどうか分かりませんが、1人の人物の生活すべてを記録できれば、おもしろかつただろうと思います。できるだけ全部。とはいえ、いわゆる「作品」だけならまだしも、ちょっとしたしぐさとか言葉とかそうしたもので記録しようとするれば、延々と映像で撮影するか録音し続けるとか、ひがな1日、その人に張り付いている必要があるかもしれません。

その人にかかわりのあるものを全てなんでもかんでもとっておく、ということであるなら、たとえば、その人が

つけている日記とかその人の活動が紹介されたりした新聞や雑誌の記事、所有している物や衣服、毎日の食事の献立、買い物のレシート、いらなくなつて捨てたゴミなど、そういったもので保存しなければいけないのではないかと、いう気にもなってきます。さらに言えば、その人のことを知っている人たちから話を聞き取る必要もでてくるでしょう。もちろん、人間同士の関係性やある人についての認識や記憶は一枚岩ではありえないので、内容としては互いに合致するものから相反するようなものまで多面的な印象が出てくる

と思います。しかしそれもまたその人の諸断片。「神は細部に宿る」といいますが、さらっとふれられる微細な話の中に、その人の大事な一面を浮き彫りにするエピソードがあったりもして、どこまでも油断ならないわけです。

私たちの今回のねらいのひとつは「その人が生きた証をのこす」というものでしたが、調査や記録を通して得たものは、ある人の「生きた証」は、作品から他人の頭の中にある記憶まで、様々なかたちで保存されているという実感でした。そんなわけで、一口に「生きた証」といっても、何をのこせばよいかは全然自明ではありません。

さて、私たちが今回の作業で行なったことは、そのように様々なかたちで日常のあちらこちらに埋め込まれ保存されている本人の「生きた証」のうち、いわゆる「作品」を中心に調査・記録し、公開するということです。また可能ならば、つくられたものについて聞き取り、それが生み出された制作背景や理由も記載するようにしました。しかし「生きた証」をのこすというねらいからすれば、とても限定された範囲

のものを記録にとどめたにすぎません。しかも、描かれた文字やかたどられたかたちには、何とも言いえない作者固有の「くせ」が現れ出たりして、わかりやすい意味や有用さには還元できないような、一見するとよくわからないものもたくさんあります。しかし、だからこそ、そうした表現にふれることはたのしく、貴重な経験でした。自分にとってよくわからないものでも、作者がこの世に生きていてそのようになしたからこそ現にそこにあるのであり、それゆえに（自分がこれまで知らなかった）人間がなしうることの可能性を実例として知らせてくれるものだからです。今回携わったアーカイブが、そんなふうな、いまだ知られていない私たち自身の姿を伝えてくれるものであればよいのですが。世界は広い。



# アーカイブのプロセスと ノウハウの公開



みずのき美術館 キュレーター

奥山理子 (おくやま・りこ)

みずのき美術館の中軸となるもの、それは、まぎれもなく「みずのき絵画教室」の存在です。今から55年前の1964年、知的障害者のための入所施設ではじまった絵画教室は、今日、全国各地で取り組みが展開されている障害のある人たちの創作活動の源流の一つとなっているといっても相違ありません。

しかし、私たちは、この55年にわたる絵画の取り組みと、そこで生み出された2万点に及ぶ作品群について、これまでうまく定義づけることができていません。いえ、そもそも十分に研究すること自体ができないのです。なぜならみずのきは福祉施設であり、アートにまつわるあらゆることを批評する主体ではないと思ってきたからです。

みずのきの絵画作品についてもっとも知られる紹介は、「アウトサイダー・アート」あるいは「アール・ブリュット」として、でしょう。しかしみずのきは、このアウトサイダー・アート／アール・ブリュットが介在した「アート」との関係の取り方において、作り手が障害のある人であることと、指導者が存在したという事実との狭間に苦悩の年月がつづきました。

2012年のみずのき美術館の開館は、この「苦悩」を「問い」として位置づけ、施設の屋根裏にかるうじて保管されていた作品たちが施設の「財産」であることを再認識し、捉え難かった多くの「課題」を「考察対象」として捉え直し、さらには、考察のプロセスや成果を社会へ発信する「主体」となっていこうとする意思表示を意味して

います。

そのために私たちが必要としたことこそが、「アーカイブ」でした。アーカイブに関心を寄せたのは、アーカイブという作業工程に分析的アプローチを持ち込まないという態度に強く惹かれたからです。もちろん各作業段階において現場での判断や取捨選択は必要ですが、大前提として、目の前に広がる膨大な作品や資料を保管、整理するというにのみ集中するという工程は、上述した美術館のあり方を体現するうえでの基礎体力、基盤づくりとなると考えました。

実際に2014年より着手したアーカイブプロジェクトをとおして、私たちは数多くの発見や気づきと出会い、それらをデジタルアーカイブとして記録していくことで、絵画教室の歴史や作品たちが、自分たちの手元に一歩ずつ近づいてくるような感覚を得ていきました。別々に記録していた内容がデータベース上で並んだ際に思わぬ発見につながったり、曖昧な印象で記憶していたことの確信につながる情報を発見できたり——。

これまで、漠然としか捉えることができなかった事柄に対して少しずつ輪郭が与えられていくということは、美術館のみならず、組織全体にとってのアイデンティティの確立にも大きな役割を果たしていきます。そのことを予見できていた訳ではありませんが、みずのきのアーカイブについて、

当初から重要視していたもう一つに、「作業のプロセスとノウハウを公開する」ということがありました。アーカイブに着手する動機自体は、冒頭に紹介したみずのき特有の歴史的背景に基づきますが、しかし一方で、これはみずのきに限って起きた出来事ではなく、障害のある人の造形活動の現場に共通する状況も多くあり、その支援に携わる人たちの抱えるジレンマとも類似します。そのため、みずのきをロールモデルと位置づけ、作業で得た知見をオープンリソースとすることで、全国各地の活動が「表現する環境」と「発信する場」に加え、「記録する」ことを取り入れることを可能とし、「なんとなく生まれてしまった奇想天外な表現」を研究可能な対象へと昇華することにつながると考えました。

このたび、みずのき美術館が取り組んできたアーカイブをきっかけに、鞆の津ミュージアム、はじまりの美術館でも実施することとなり、3つの異なるプロセスと実績をこうして1冊の本としてまとめることができたことは、この分野における一つのターニングポイントといっても過言ではないと思います。

そして、この本を手にした方の中から実際にアーカイブの作業が始まること、あるいは研究者が研究を始めることを期待して止みません。私たちみずのき美術館も、まだまだ作業は続きます。

※本書は以下の事業をもとに制作しています。

2017年度 「全国の作品調査に向けたアール・ブリュット美術館におけるアーカイブ構築」

2018年度 「全国の作品調査に向けた三館連携アーカイブ構築」

主催：みずのき美術館（社会福祉法人松花苑）、鞆の津ミュージアム（社会福祉法人創樹会）、

はじまりの美術館（社会福祉法人安積愛育園）

助成：日本財団



## 「どうしよう」からはじめる アーカイブ

作品を記録し、伝える方法

2019年2月16日

監修	須之内元洋
著者	奥山理子+武田幸子+阪本結 [みずのき美術館] 津口在五+三宅良子 [鞆の津ミュージアム] 岡部兼芳+大政愛 [はじまりの美術館]
編集	佐藤恵美、はじまりの美術館
デザイン	chichols
イラストレーション	ふるやまなつみ
印刷	株式会社イニユニック
発行	みずのき美術館+鞆の津ミュージアム+はじまりの美術館
助成	日本財団
お問い合わせ	はじまりの美術館 〒969-3122 福島県耶麻郡猪苗代町新町4873 TEL：0242-62-3454